

特103

77

滑誓

山

下

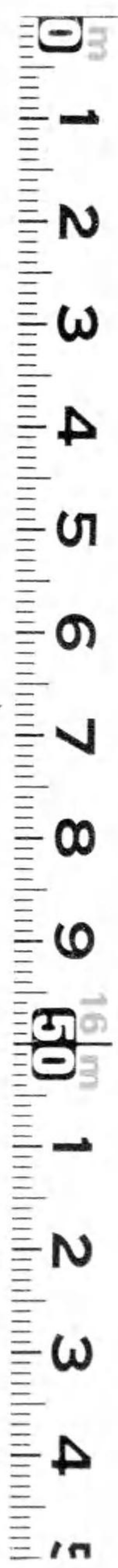
破

鏡

著

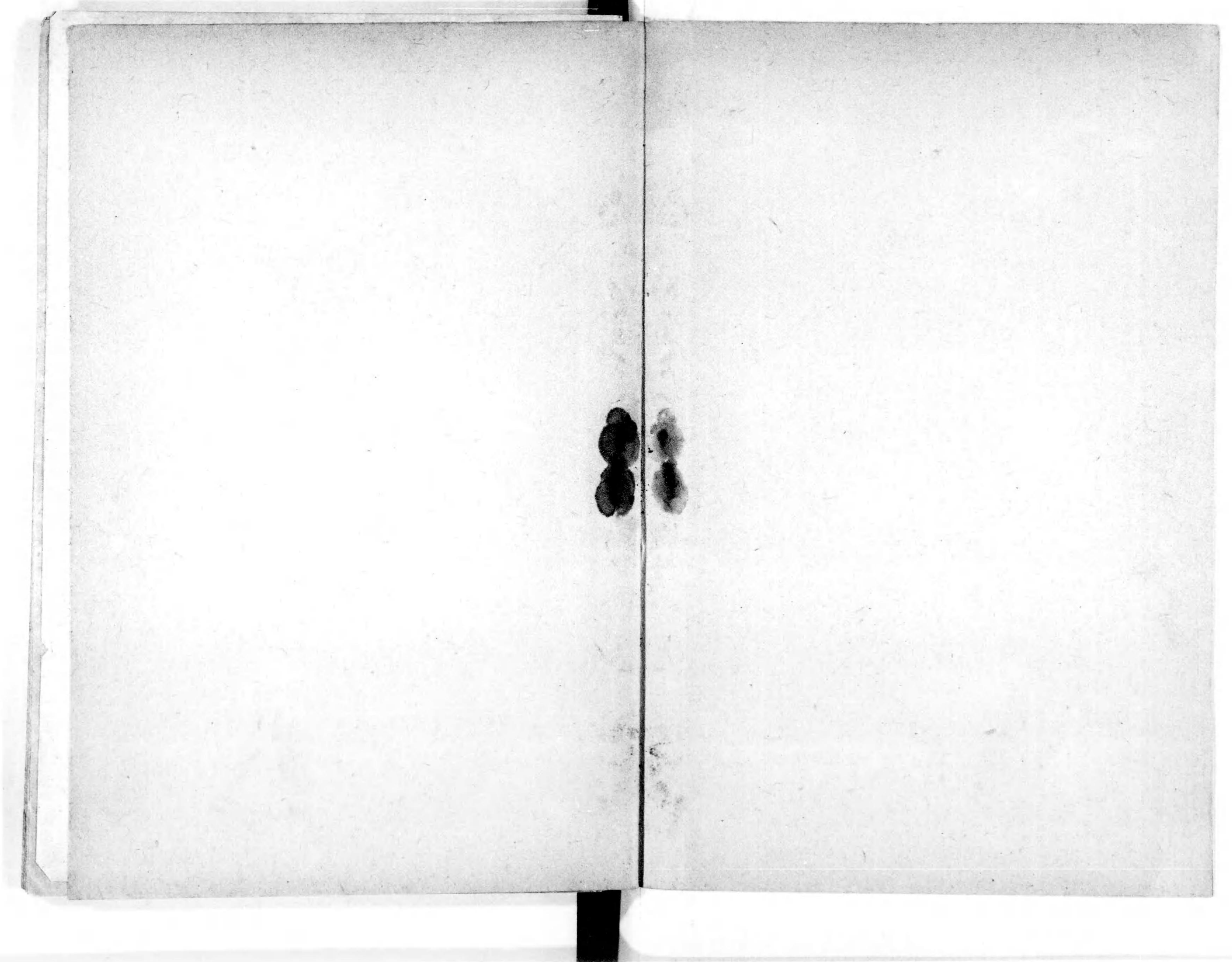
ほれ
た
仲

古か

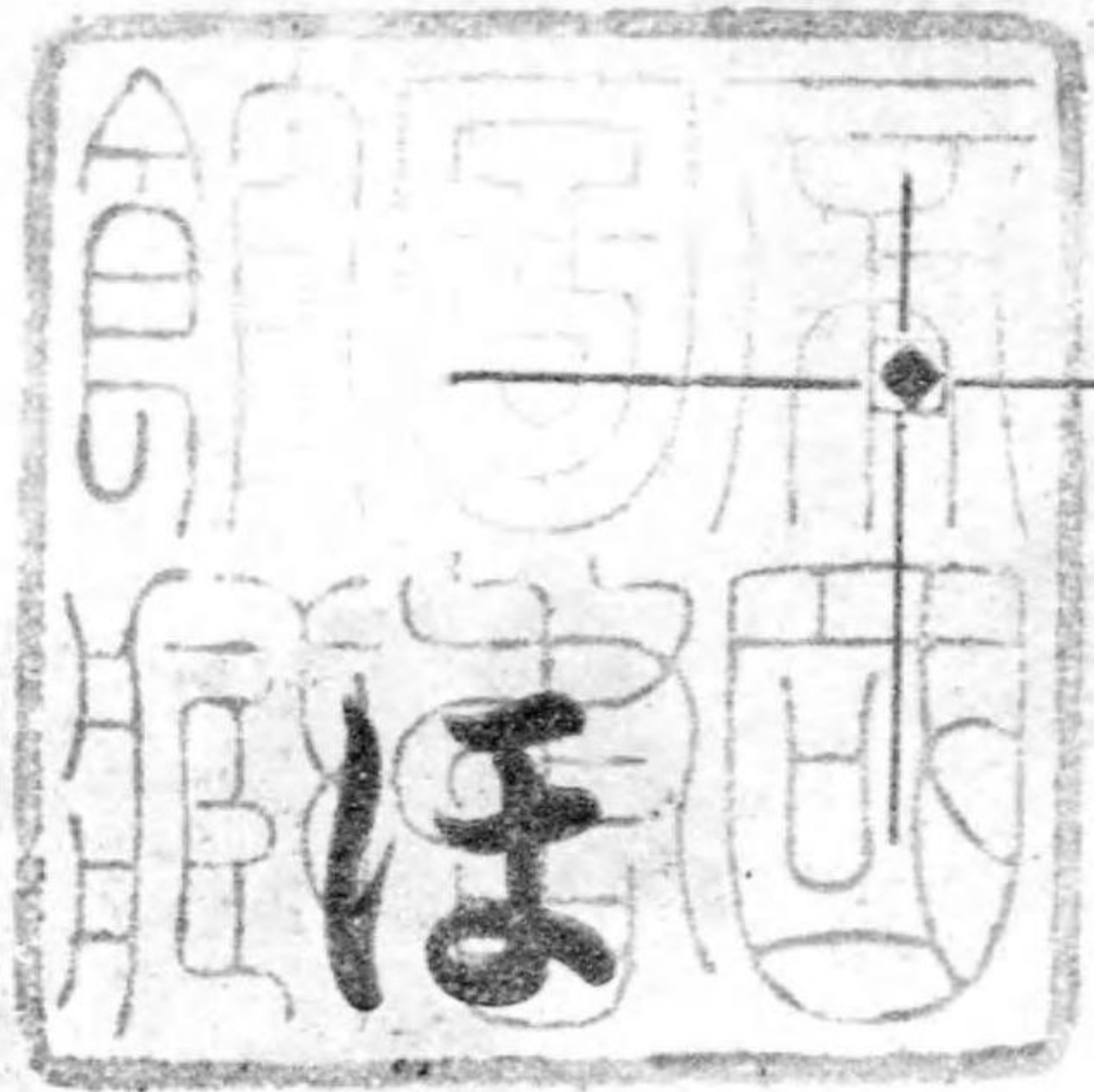


始

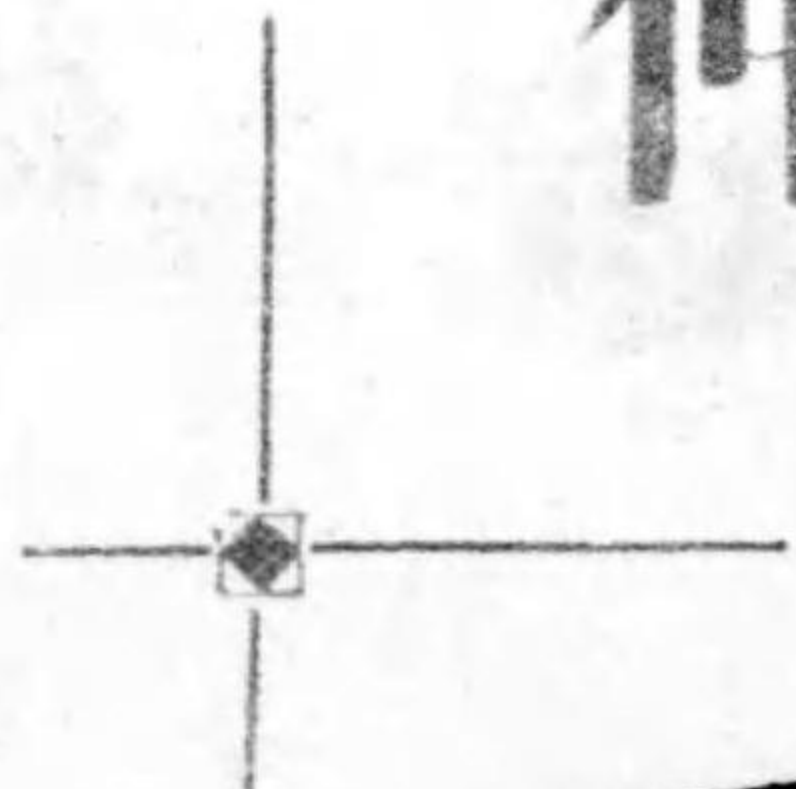




特103
77



れ
た
仲



大正
6. 8. 10
内交





滑稽
惚れた仲

山下破鏡作

一 東京大旅館球戯室

こゝ東京大旅館の球戯室、朝夕に出入する内外客へ便利のため、室の側面に洋酒店を設け、その附近に二三の小食卓を配し、此方は球臺を据ゑついたり。

洋酒店の番頭理一は徒然に洋盃をひねくりつ、一人のボーイは球を突き、一人は手を挙げ欠伸なし、時間の経過を遅しと感じつゝあり。



彼方にきこゆる鬨腕の音を出すヅワイオリンの弾手は誰?
(幕明く)

ボ乙 オイ止さないか、如何に世間が不景氣だつて、この大旅館の
球戯室に客が一人も居ないで、ボーイがキューを持つて遊んでる
やうぢや心細いぜ。

ボ甲 何もさういふたものやない、その中に錢はなれの好い亞米利堅人
や、買物を好うする英吉利西の金満家が來んとも限らんがな。
ヘン、旨い夢ばかり見て居るぜ、然し内地の客と來たら、何故ア

ボ乙 ア客番だらう、碌々に祝儀を呉れる奴もありやしなせ。

ボ甲 日本人も客番やけれど、獨逸人や佛蘭西人はズット客番や。

ボ乙 それでも來ないにや益しだらう。

ボ甲 來ても來いでも我等の懷中は同じとや。



理一 オイ、二人とも好加減にしないか、そんなことを云つて、館の
主人にでも聞かれると直ぐ解雇になつちまうぜ。

ボ甲 解雇になつたら堪らんさかい、欠伸しながら斯して遊んで居る方
が益しか、ハ、ハ、ハ。

ボ乙 イヤ、そんなことは何でも可いが、一體佛蘭西人と獨逸人は、何
故アア仲が悪いのだらう。

ボ甲 ホ、お前はその譯を知らんのか。

ボ乙 そんな至難しいことを知つてる位なら、ボーイなんかしちや居な
いよ。

ボ甲 事理を解らぬものは困つたものやな、知らんのならその譯を話
して聞かしてあげやうか。

理一 大層博識らしいことを云ひ出したな。



ボ甲 解らぬとがあつたら何でも聞きなはれ、かう見えても世界中何國の人でも交際して居る人はないのや。

ボ乙 大層な高言をあげるせ、では先づ今の譯から聞かうぢやないか。

ボ甲 そんなとは譯なしや、昔、佛蘭西に「アルサカイ、トラレンス」といふ土地があつたが、戦争して獨逸に占領れて獨逸の領となつたよつて、佛蘭西人が獨逸人を憎むのや。

ボ乙 何だ、夫ツだけのとなら、おれだつて知つて居らア。

ボ甲 解つて居るなら今ま乃公がいふたを話して見い。

ボ乙 そりや、その……何だ獨逸人が佛蘭西人に「ネーカラ、トラレネー」といふ所を占領れたのだ。

ボ甲 獨逸人が占領れたのやない、處の名も無茶や「アルサカイ、トラレンス」や。



ボ乙 「ネーカラ、トラレネー」だ。

ボ甲 そら異ふが。

ボ乙 手前が違つてるのだ。

理一 オイ、何を不得要領議論をして居るのだ、處の名は兩人とも間違つて居るのだ、眞實の名は「アルサス、ローレンス」と云ふのだ。

ボ乙 だから先刻から、さう云つて居るぢやねえか。

理一 負惜みを云つても駄目だ、つまり一方は大阪の英語、一方は江戸ツ子の英語だから、詞も意味も違つて來るのだ。

ボ二人 さうかなア。



ボーイ等が善悪なく談話しつゝある處へ、平常から理屈臭き辯護士堀一徹、羽織をスラリと着流したるに相反て、鼻下鼻厳しく出来る。

ボ乙 ヤア堀先生だ。

ボ甲 ハ、ハ、唯今……

ボーイ二人は他に何か用務あり氣の動作をして、こそくと逃去る。

堀 オイ、コラ〜待て今日も貴様等を負かして、ゲーム代を無用に
してやるのだ、ハ、ハ、何た番頭、相手をするか。

理一 へ、——これは入らつしやいまし。

堀 相手をするか、せぬかと云ふて居るのだ。



理一 へい、御酒の相手で御座いますか。

堀 コラ、誤魔化すな、ゲームの相手をしろと云ふのぢや。

理一 へい……へい。

堀 オイ、何故生返事をして居るのか、大體貴様等は客人の用向を聞き、客人に満足を與ふべき義務を有つて居るのだぞ、又た吾輩は確かに貴様等をして吾輩の命令に服従せしむべき權利を有つて居る——と云ふのはツマリ吾輩は間接貴様等の給料を支拂つて居るからぢや。

理一 へい〜。

堀 サアこの理屈が判つたら、吾輩の命令に従つて相手をしろ。

理一 へい〜、然し球戯なら私よりボーイの方が……

と云ひさして見返れば、ボーイ等は、こそくと逃去りて影だに見えず



理一は吃驚して。

理一 オヤツ……………

堀は氣短かく手頃のキューを執りあげ球を突きつゝ。

堀 オイ、何したのか。

理一 ヘイ、た、たい今……………

番頭理一は餘儀なくキューを執り球臺に進みて。

理一 何ぞ御手柔かに。

堀 ム、よし／＼然し五十に二百だぞ。

理一 先生、それぢや所詮……………何か五十の百五十位なところで。

堀 イヤそれぢや吾輩が負ける、吾輩の命令通にすりや可いのぢや。

理一 ヘイ／＼。

番頭は故意と下手に突き、堀は汗を流しつゝ球を突く。



斯かるところへ、身體に亞米利加式(特に桑港附近)の洋装をなせる、ハ
イカラ若旦那と呼ばれつゝある輕井佻三は、藝妓うき子、舞妓おかる、
仲居お仲を連れて出で来る。

ボーイ等は輕井が祝儀を呉れさうな好客と観てとり飛んで出て。

ボ乙 入らつしやいまし、何ぞ彼所へ。へ、へ……………

と輕薄笑ひしながら、食卓と椅子を指さし、ヒョコ／＼と頭を下ぐ。輕

井はじめ一同椅子につく藝妓うき子はフト堀を見て。

うき あらッ！

うき子が「あらッ！」と叫びし聲に堀は不圖氣付いて視線を向け。

堀 アーうき子か。

と言ふ拍子に突きつゝある球を跳飛ばせしかば、球は轉がつて球臺の下
へ入り番頭はキューの後端にて腹を突かれ「あッ」と叫びて倒れたるが直



ぐ澁面作つて起立る、うき子、おかる、お仲はそを見て思はず。
 三人 ホ、、、ハ、、、。
 と打ち笑ふ。

輕 オイ、何をして居るんだ、こゝへ掛けないか。

輕井は堀を睥睨にかけて、女三人に腰を掛けよと命ず、うき子は輕井が
 氣づかぬやう、堀に秋波を送る、堀は忌々しげに輕井を見て。

堀 フン、馬鹿々々しい。

番頭理一は空呆にとられて。

理一 ヘーイ、何で御座いますか？

堀 何でも可い、今度は貴様の番ぢや。

理一 ヘーイ。

とまた堀の相手を勤めて球を突く。輕井は理一が度々叩頭するを眼に



留め。

輕 誰も彼も米踏蟻然として、よくもヒョコ／＼頭が下げられるも
 のだ。

大體、日本人といふ奴は文明のエチイケート即ち禮儀作法を解し
 て居らぬから困る、彼等の禮儀作法と稱するものは所謂室町以降
 豊臣時代の産物たる、愚にもつかん茶禮三昧のもので、文明の今
 日では寧ろ無用の長物だ、眞の禮式なるものは所謂實用的で形式
 に流れない、西洋流に限るのだよ、何故それが實用的かと云ふと
 ……

と輕井は得意氣に云ふ、藝妓仲居はそんなとは聞きたくもなしと、言葉
 を入れる。

仲 若旦那、何もお誂へなさらないので御座いますか？



輕井はお仲の言葉に。

輕 それも實用的の立脚より見れば……
何を云つてゐるのですよ、自烈躰ッ!

輕 マアさう急かすとも可いよ、では先づカクテイルでも呑みながら
緩々謹聴をおし。

オイ、ボーイ〜、カム、ヒア。

かる ホ、私だつて英語位解つてよよ、ミスター、ボーイ〜。
呼聲にボーイは進みて。

ホ 何かお詠へで御座いますか。

輕 カクテイルを……。

輕 と云ひながら故意らしく三人の女を見渡し。
ワン、ツー、スリー、フオー!



と數へ見て。

輕 四つ呉れたまへ。

ホ ヘイ、カクテイルは何を差上ませう?

輕 だからカクテイルといつてゐるぢやないか。

ホ ヘイ、ですがそのカクテイルは、何なカクテイルを?

輕 君はこの大旅館に居ながら、カクテイルを知らないのか、何でも
可いから早く呉れい。

輕井は半可通のとして、カクテイルに十數種類あることを解らざるを、ボ
ーイは可笑しく思ひけん、他方を向きながら低聲にて。

ボ 頓痴氣奴ッ!

輕 何を?

ボ イエ、アノ頓痴カクテイルを混成ませうか?



輕 ム、それで可い、から早くして来い。

ホ フ、ン。

ボーイは心中冷笑しつゝ、無茶苦茶に種々の酒を混合し、洋盃に入れ四人に差出せば、四人は同時に取上げ呑干せしが、アルコールの強きに驚きて。

女三人 アーッ!

三人の女は洋酒を吐出して。

かる 何といふ強烈酒でせう。

うき 私咽喉がヒリヒリするよ……。

仲 アーひどい。

輕井もしたゝか顔を擧めしも、故意と平氣を装ひ。

輕 イヤこの頓痴カクテイルは、今のやうに口中が爛れさうな點に、



云ふに云はれぬ味があるのだ。

と無理に呑干し半巾にて咽喉を押へしかば、ボーイは可笑しさを慄へかねる。

うき 味があるか何があるか知らないけれど私モ一澤山。

かる 私もよ。

仲 私、まだお腹の内が轉倒へるやうだわ若旦那、記憶てらつしやい

よ、悪らしい。

女三人の言葉を聞て輕井は愉快げに打笑ひ。

輕 ハ、それだから御前達は何も話せないよ、ところで今の話だね、つまり今いふた實用的と云ふのは、即ち人間に必要なものを意味するので、卑近例は我々が日常に食ふ米だの、現に身體に纏ふて居る衣服がそれだ、それからこの手巾を斯う振ると、ブン



とヴァイオレットの香気がするだらう、そこが即ち實用的だ全體
我國では香水を贅澤物のやうに云ふて居るものもあるが西洋では
香水は交際上第一の實用物なのだ、假へば斯いふ鹽梅に……。

と輕井はうき子の手を執て引寄せ。

輕 斯して他人と接近する時にだね……。

うき エ、何ですつてえ。

輕 斯して他人に接近する場合に、その人をして美感を覚えしむる爲
には、是非香水の必用があるので、つまりそこが社會的の道徳の進
歩して居る點なので……。

と云ひながら、益々うき子を近く引寄せれば。

うき しりません！

と云ひつゝ、強く突飛ばす、輕井は思はず椅子と共に仰向に倒れ。



輕 ア痛た……これは何も亂暴だ……實に何も驚いたね、ア痛い

く。

と腰を撫擦つゝ起上る輕井の胸倉をうき子は捕へて。

うき ちよいと貴郎、今いつた通り、モ一遍いつて御覽なさい、人を……

……人を馬鹿にして……他人と斯して接する時つていひました
ね、他人つて確かに云たでせう、私、貴郎と他人ですか、イエス
貴郎は私を他人にするつもりなんです、エ、若旦那、貴郎つて

いふ人は眞實に……エ、悔しいッ。

うき子は力にまかせ輕井をこづき廻す、輕井は憚々して。

輕 ア痛い、これ、これ、うき子待つて呉れ、俺が——俺が悪かつ
た、堪忍して呉れ、何もお前を他人だといつた譯ではない、
それはそのホンの言葉の……ア、これ宥恕して呉れと云ふのに



………助け船く。

仲　ホ、マアうきちゃん、モウ堪忍してお上げなさいよ、可愛相に若旦那だつて、さういふつもりで云つたのではないでせうから、ねえ若旦那。

輕　その通りく。

うき　イ、エ、私、他人よ、若旦那に他人にされて仕舞つたのよ、可いわ、可いわ、私、死んじまふから可くつてよ。

故意と身體をふりながら泣く眞似をする。

かる　眞實に若旦那は酷いわ、姉さんをこんなに怒らしちまつて………

貴郎、何するおつもりなの？

輕　何と云つて何も僕は………何もそんなつもりで云つたんぢやないのだからね。



輕　何も一體お前は腹立ちつぼくて困るよ、オイうき子、モ一好加減に機嫌を直して呉れても可いだらう、エ、オイおれが悪かつたら、何卒堪忍して呉れたまへ、エ、オイうき子く。

うき　と輕井は云ひつゝうき子にいなだれかゝる。

輕　知りませんよ！

かる　まだ怒つてるのか何も困つたなア。

仲　貴方が悪いからだわ。

輕　若旦那お謝罪なさいよ。

うき　謝罪つても聴いてくれんので困つちまふ。

輕　イ、エ謝罪らなくても結構、私、何せ捨てられたんだから………アあれだもの、ね、オイお仲間、何か君から能く僕の意中を話して機嫌を直してやつて呉れたまへ、オイ後生だ懇願む、この通り



だく。

色慾に迷へば愚に返つて、輕井は仲居のお仲を拜む。

仲 アラお止しなさいよ見ツともない。

輕 何卒々々。

うき お仲さん打捨て置いて頂戴よ。

輕井はうき子の氣勢をそらさんとにや。

輕 僕は一寸氣息抜きに湯に浴つて来るから、その間に何か機嫌を直

さしてね、いゝかい依頼んだよ。

おイ、ボーイ浴室へ案内して呉れ。

かる マア若旦那、お待ちなさいよ。

輕 よろしくね。

と輕井は眼にて「機嫌を直さして置け」といふ意を表現す。



ホ 御案内致します。

輕井はボーイの案内につれて、浴室へ行く。

うき子は輕井が立ち去りたるを見てケロリとして顔をあげ。

うき ア、骨が折れた。

かる アラ姉さん眞實に怒つたのぢやなくて？

うき 明白とさ、誰があんな野奴に正氣で倍氣なんかしてやるものか。

仲 オヤ〜。

堀は球戯の手を止め、輕井うき子等の痴態を眺めて笑ひ居りしが、輕井が退りしを見て。

堀 オイ、うき子、相變らず凄いもんだね。

うき ホ、面白かつたでせう、これもみんな貴郎のためよ。

堀 フム、旨く云つてるぜ。



堀は視線をお仲に向け。

堀 何しろ恐るべきものだ、被告が凄いとこへ、辯護士はお仲といふ傑物がついて居るんだから、どんな裁判官も手を置く筈だ。

仲 アラ他聞の悪い、私なんかそんなにはれるとはありやしませんわ、そりやうきちやんこそ貴郎のお仕込だけとはありますけれども……。

うき 眞實よ私堀さんに關係するまでは、このかるちゃんよりか初心だつたわ。

堀 おかるだつて中々脇へ置けんぞ、形態は少さくつても、これで大の男子を手玉に取るんだからなア。

かる さうでせうとも、モルヒネは一撮でも人を死しますとさ。

堀 そら！これだもの吃驚いちまふ。

かる 私、昨日姉さんから聞いたのよ。

堀 ハ、この姉さんの仕込みなら、全く後世怖るべしだ。

うき ときに今の男子は何だえ、宛然舶來雜貨店の廣告屋のやうだねえ眞實に局外から見居たら随分面白いでせう、何でも二月程前にサンフランシスコ 桑 港から歸つて來たんださうですがね、それはく何から何

までハイカラくるめで、誰も彼も中てられちまふのよ。

堀 ところがお前一人その正面に立ちながらピクともせず手近く引よせ、むんづと組む勇氣の程こそ怖しかりけだね。

うき 正可それほどの強者ぢやありませんわ。

堀 然し相手がお平の長芋然と白つちやけて居るから、お前の方が組敷かれさうで險呑だ。

うき あらッ、またそんな悪れ口を……。





うき子は一寸堀を抓る、堀は吃驚して。

堀 アイタ、、、酷いことをするね。

うき ホ、好氣味だわ。

かる 私も助力であげてよ。

仲 私もよ。

と三人にて抓る。

堀 ア痛い、こ、こ、こりや何も堪らん。

堀は抓らるゝ痛さに逃せば、三人はその面白さに逐廻す。

際から甲ボーイ一葉の名刺を銀盆に上せ携帯來たる、堀は是れ幸とボーイの後にその身體を隠す、三人はボーイを堀と誤認て、ボーイをグツト抓る。

ホ ア痛い、痛い、何をしなはるのや、ア痛い、

かる あらツ！

仲 あらマア堪忍して頂戴よ。

女三 ホ、、、。

ホ 吃驚しましたがな、酷遇にあはしなはるなア痛……。

ホーイは苦笑しつゝ堀に向ひ。

ホ ヘイ、此御方が先生にお目に懸りたいと云ふて御越になりました。と名刺を渡せば、堀は名刺を一見し。

堀 ア、さう、訴訟依頼人ぢやで面會しよう、こゝへ通して呉れ。

ホ ヘイ。

ホーイは退る。

うき 先生、私等が居ちやお邪魔でないこと？。

堀 イヤ關はん、マアこゝに居るさ。





ボーイに案内されて訴訟依頼人宇多井勝太は上場る。

宇多井さんを案内して参りました。

堀 さうか。

ヤア宇多井さんですか、何卒これへ。

堀は宇多井に椅子をすゝむ、宇多井は笑を含み。

宇 何もお楽しみのところを邪魔して相済みません。

堀 サアおかけ下さい。

宇 御免——。

と宇多井座に就く。

ボーイは堀の氣附かぬやう別に携帯つて来た書附を密と番頭理一に手渡して何か呷く。

理一は黙頭て堀の傍へ行き。



理 先生、誠に相済みませんが、即今會計部から、これを持つてまい

りましたから……何か……。

と恐る／＼件の書附を差出す。

理一が渡せし書附を堀は一見し。

堀 こんなものを今持つて来ずともよい。

理 で御座いますが會計の方が、八ヶましう御座いますから、何卒お仕拂ひを……。

堀 馬鹿ッ！、仕拂ひなら吾輩の邸宅へ来い、諸拂ひは邸宅の會計でするのが、吾輩の家憲ぢや、假へばお前が會計部からと云つた如く、それ／＼に規則があるぞ、家憲を破るとは出来んから、直ぐ仕拂ふ譯にはいかんよ。

理 へーい……。



理一は濫々引下る。

堀は理一に目もくれず宇多井に向ひ。

堀 さうして宇多井さん、一件は如何になりましたな？

宇 先生のお蔭で大勝利になりました、誠に實に何も有難いことで御座

います。

堀 さうぢやらう、何しろ吾輩が先方の證據不備の點に切込んで、雄

辯滔滔と論攻し立てたから、頑強なる債權者も我を折つて和解を

申込んで来たのだ、さもなくば君は今頃破産して居るのだせ。

宇 全く……。

堀 假ひ事實如何あらうとも訴訟の要は、相手方の證據を湮滅せしむ

るにあるのぢや、勝敗は唯その間の呼吸一つなのだ刑事上の問題

にしてもその通り、證據さへ湮滅することが出来れば、何を行つ



たつて差支はないのだ、現に今度の訴訟事件の如きは……。

宇 宇多井は堀の法律論を煩さしと。

堀 先生、御議論は又たその内に、お伺ひ致すことにして、今日は他に

少々用事が御座いますから、これで失禮致します何も御盡力であ

りがたう御座いました。

堀 宇多井は叩頭して辭し去らんとするに何におもひけん堀は狼狽て。

堀 ア、宇多井さん一寸お待ち下さい、君は御報告と謝辭の外に御用

件が一つある筈ですが。

宇 ハア何ですか？

堀 と宇多井は頭をひねつて考ふ。

堀 他でもないです、豫て口約して置いた吾輩の報酬金を、お失念な

すつちや困るぢやないか、サア受取りませう。



宇 そんなものをお渡しする事は出来ません。

堀 何！仕拂はん？

宇 報酬金を仕拂はんのは吾輩の家憲だ、家憲を破るとは出来んから仕拂ふとは出来ん。

宇多井は堀が番頭に云ひし句調を真似る。

宇 ハイ左様なら。

と宇多井は去る。

堀 アー、やられた。

堀は呆氣に取られつ茫然たり。

二人の對話を聞き居りしものは可笑しさに思はず笑ふ。

女三人 ホ、、、。

理 ハ、、、。



一同 ホ、ハ、ハ、ホ、ハ、ハ、、、。

一同の笑聲に堀は屹然なつて、宇多井の後を逐はんとする。

うき あら先生、何所へ行つしやるの？

堀 ム、一寸其所まで。

うき 貴郎、私を捨て、逃げる御意志ですね。

堀 イヤ、そ、さういふ譯ぢやない。

うき 貴郎がお歸りなさるなら、妾も歸るわ。

堀 イヤ直き歸つて来るから、暫時待つて呉れ。

糞、吾輩の報酬を取らんで置くものか。

堀はいそぎ宇多井の後を逐ふて行く。

うき ホ、、、堀さんは今日餘程如何して居るわねえ。

いる 姐さん、食堂はまだ開かないのですかねえ。



うき マアこの妓は餘程食意地がはつてるよ。

かる あら、さうぢやないわ。

仲 ホ、然し若旦那は何時までおめかしして居るでせうねえ。

語る際から人の来る音きこも。

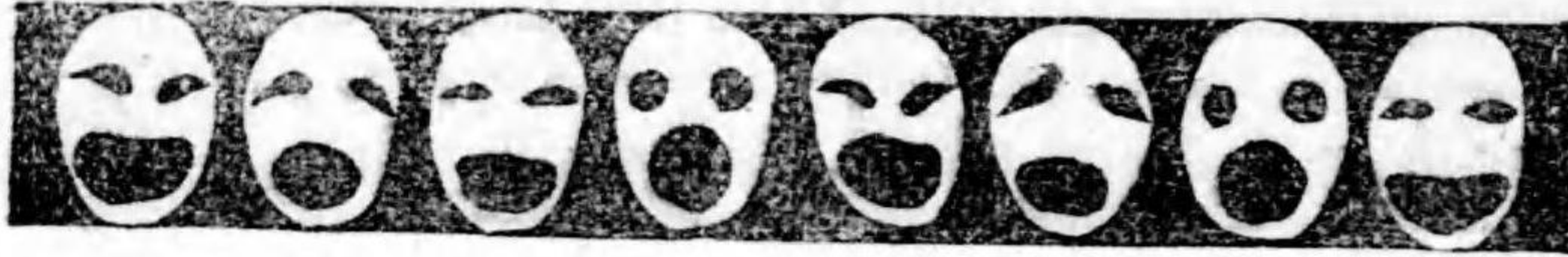
新來遊の獨逸軍人リーベーは、案内者増山繁榮を連れて来る、番頭理一はそれと見て。

理 入らつしやいまし。

ボーイ 入らつしやい。

リーベーは不圖うき子を見て美人と思ひけん視線を轉せず昵とうき子を見詰め、ポケットより葉巻烟草を出して口に啞へ、火を點んと手をポケットに入れてマツチを探れど、手に觸れず、理一に向つて。

リー Kellner, Zindho zehen.



ホ 番頭さん、ありや何かいつてるんです？

理 乃公も獨逸語は了解ない。

増 マツチを呉れと云つてるのだ。

ホ ア、さうですか。

ボーイはリーベーに、燐寸に火を點けて渡す、リーベーは葉巻烟草に火を點け、烟を吹かしつゝ何語か増山に囁く、増山は心得てうき子に接近き。

増 失敬ですが貴女は新橋ですか？ 赤阪ですか？

うき エ、私……。

増 甚だ突然ですが、この西洋人は獨逸で名高い金満家の軍人ですが是非貴女と知己になりたいと云つて居るのです。

うき オヤ、さうですか何も有難う、私は新橋の浮草屋うき子つて呼びますの、何か御最負を……。



増山は何かリーベールに囁けば、リーベールは進んで、うき子と握手す、うき子は故意と情を含んでリーベールを眺める。

リー Bringen Sie mir der Chamhagne.

増 ya(ヤー)

増山はリーベールに答へて。

増 オイ、ボーイ三鞭酒を持つて来い。

ボーイは注文に従ひ三鞭酒を出すリーベール、うき子、増山の三人三鞭の洋盃を舉ぐ。

紳士花井實は夫人貞子と共に、旅館に於て夕食を喫めんと、出入の大工頭領神田力藏を従へて入り来る。

番頭理一、ボーイは、それと見るより出迎へて慇懃に。

理 ヤツ、入らつしやいまし。



ホ甲 今日結構なお天気で……。

ホ乙 奥様よく入らつしやいました。

花 相變らず繁昌で結構ですね。

理 へい有難う御座います御蔭さまで、へ、……何か直ぐに食堂の方へ……。

花 お差支はないですか？

理 イエ何う仕りまして、決して差支は御座いません。

花 オイ、御案内をしないか。

ホ甲 へい、御案内。

花 ぢやア貞子も力藏も……。

力 へい、何も素的に立派ですわえ。

貞 貴方御苦勞さまですわえ。



ボーイの案内により花井夫妻、力蔵は食堂に入る。

ボ乙 何です理一さん、アレが眞實の紳士といふのでせうね。

理 さうだとも、第一見たところからお立派ぢやないか、あのお洋服の結構など、着用者が着用者だけに一段と引立つといふものだ。

ボ乙 それに金銭は山ほどあつて、切ればなればよし、情が厚くて物優しく、何所に一つ缺點のない旦那ですな。

理 それに奥さまも中々評判の好いお方だ！

ボ乙 素晴らしいもんですな。

理 えらいものだよ。

ふたり 二人は花井の批評とりく、うき子は始終花井の姿を眺め居たるが。

うき アノ一寸ボーイさん。

ボ乙 ヘイ。



うき 今のお方は誰さんなの？

ボ乙 ヘエ、貴女あの有名な旦那を御存じないのですか？

うき 知らないから聞くのですよ？

ボ乙 これは恐入つた、あの方は貴女、番町の花井實さまと仰やつて、日本一の金満家の慈善家です……。

うき オヤ、あの方が花井さん？

ボ乙 姐さん餘程好男子だわねえ。

仲 眞實に御様子が好う御座んすわ。

うき マア私、こんな服装でキマリが悪かつたわねえ。

とうき 子は茫然自失。

うき 子の惚恍せるに反し、リーベは増山に何事をか囁いて立あがる。

増山はうき子の脊を叩き。



増 うき子さん旦那が貴女と庭園を散歩したいと云つてお居ですすが
行て下さいませか。

うき ア、さうですか、私一寸こゝで待合す方がありますから……。

増 お客さまですか？

うき イエあの少し……どうか一足お先へいらつして下さいまし。

増 さうですか。

増山はその旨をリーベに囁く、リーベは少々失望の體にて、増山と
偕に行きかゝる。

斯かる所へ佛蘭西人アーメ案内者加々見と共に出來りて、リーベと
顔を見合す、リーベはイト憎さうに、アーメを見て葉巻煙草を投捨
て、増山と共に食堂さして、その場を去る。

アーメはうき子を眺め、其の婀娜なる姿を見て恍惚となる、加々見は



酒場へ行き理一に向ひ。

加 番頭さん、この客は暫く逗留致しますよ。

理 へいへい。

加 宿料は二十二圓位のところで頼むよ。

理 へいへい、承知致しまして御座います。

加 僕は一寸便所へ行つて來るからね。

加々見はアーメを遺して便所へ行く。

アーメは番頭理一に向ひ。

ア Cammi Avez-vous be fons theatre ici (番頭さん當地に高等劇場が

ありますか?)

理 へい、生憎佛蘭西語は存じません……。

アーメは自烈氣味に見えしがツカ〜とうき子の傍に寄つて。



ア Quel age avez-vous.

うき 何です?

ア Quel.....?

アーメーは同語を繰返す。

うき 私には了解ませんわ、何のとだらう?

仲 私だつて了解りさうな筈はありませんわ。

かる 姐さん、必と貴女に惚れたといふのですよ.....。

ア Quel.....?

とアーメーは又も繰返すところへ加々見は歸り來りて、アーメーの言葉
を聞き、うき子に向ひ。

加 貴女のお年齢を尋て居るんです。

うき 年齢ですか、私二十一よ.....。



加 二十一は小々過多るね、十八歳位に云つて置ませう。

うき ハア、ですが何故そんなことをお尋なさるの?

加 この人は佛蘭西の大金満家で、御承知でせうが、お雪夫人を落籍
したモルガンさんよりも百倍も財産を所持つて居れるのです、貴
女は交際して見る氣はありませんか?

うき さう、それは結構ですわねえ。

とうき子は慾に眼が眩み、アーメーに秋波を送る、加々見は又この趣を
アーメーに通す。

ア (三)ウイ)

といひ進みて、うき子の手を執るところへ堀辯護士歸り來り、その状態
を見るより嫉妬を起して、地團太を踏む、兩人はその音に驚いて手を放
なす、間もなく輕井桃三が入來たりて、うき子を引つけしかば堀、アー



メー、加々見等何れも猜疑の眼にて二人を見る。
お仲、かる次はこの結末は如何になるだらうと氣を揉む。
理一とボーイは何をか密かに囁く。(舞臺一轉)

こ、旅館の大食堂。室内粧飾の壯麗は云はずもがな、配列したる食卓の上には、内外各國の珍味佳肴あり。中央の食卓は誰を待つためにや、裝飾の眼に入るのみにて人はなくその右手の食卓に花井實、同夫人貞子、神田力藏著席。
左手の食卓には獨逸人リーベー并に案内者増山の二人、口を働かしつありて、ボーイは給仕に忙し。(廻舞臺止る)

カ エ、旦那、世の中のもの面白へもんぢやがアせんか、私等の若



え時分にやア、鳥獸類の肉は人が食ふと、家内に死んだ人でもあつた時同様に、神様の鳥居を潜れねえの、高貴の人の前へ出られねえのつて、宛然穢多のやうな待遇をされたもんですが、今ぢやアかうして旦那方をはじめ奥様までが、平氣で此の小さな熊手だの、庖刀だのを持つて切りながら食ふなんて、實に變りや變るもんぢやありませんか。

花 ハ、また頭領が昔時の述懐をはじめたね、さうく過日明治の初年頃出版になつた、川柳本を見たら、斯ういふのがあつたつけ「牛喰ふと聞けば恐ろしお姫様」「蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲」をもぢつたものだが、この時代の人情を能く穿つてあつて、面白いちやないか。

貞 ホ、さ、仰しやると、その時代に斯して私等が洋食でも喰いて



居つたら世人は何と申したで御座んせうねえ。

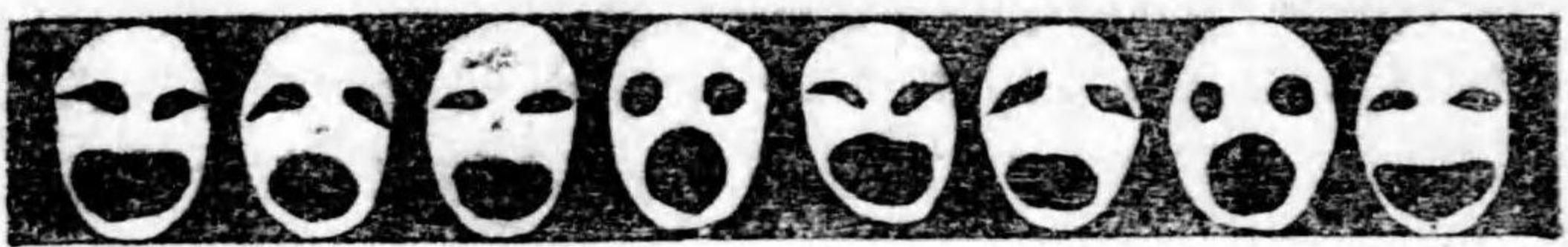
イヤ、それこそ大變な大騒ぎで萬一私等のやうなものにでも見られたら、打殺されたかも知れませんが。

或はさうかも知れないね。

ですが頭領を、今かうして喰べるやうにしてあげたは、妾の力ですよ。

カ エ、そりや仰しやる通りで。御宅で奥様の御手料理で戴くまでは仲間の奴等が洋食を喰つたと聞いても、無闇に腹が立つて睡でも引かけてやりかねなかつたんですが、今ちやアお蔭さまでスツカリ發起してしまつたんです。

花 洋食喰ふに發起はよかつたねハ、サア、遠慮しないで澤山お喰べ。



カ エ、有難うがす、序に其の「コンニャク」つと云ふ物を、モー一杯

戴きやせう。

貞 ですが頭領、お前さん大分酔つてるやうだよ。

カ 何の貴女、これしきの物に酔拂ふやうな力藏ぢやありませんや、

へ、滅法旨えや。

力 力藏喜悅に入りつゝある所へ、ボーイは輕井佻三、うさ子、かる次お仲の一連、堀辯護士、佛人アーメー、通辯加々見等を案内し來る。

ホ 堀先生、貴方は何ぞ其方に……………。

堀 ム、宜しい、貴方達失敬します。

と堀は花井等に會釋する。

花 サア何ぞ。

堀は花井の言葉に同じ食卓に就く。



ボ それから佛蘭西の旦那は、何ぞ彼方の獨逸の旦那と、同一食卓に願ひます。

加 よろしい、さういつて見やう。

加々見は何語かアーメーに囁けば、アーメーは不平を面に示し、リデーと同一の食卓に就く。

輕井は傲然と三人の女と共に、中央の食卓に就き。

輕 オイ〜ボーイ、今度は先刻の鈍痴カクテイルでなく、甘いカク

テイルを呉れ、ユー、サーヴエ?

ボ ヘイ〜、アイ、サーヴエで御座います。

輕 ちやア直ぐ持つて來い。ブリース〜。

ボ 直ぐと申す譯にはまゐりません、一寸お待ちなすつて。

輕 何だ? 待つて呉れと、サーヴエとは辛いね、てなと仰しやいまし

たかね。

輕 何の事だか薩張わからないわ。

輕 亞米利加の洒落だ、何だ舶來の洒落は大したものだらう。

輕 何をいつてるんですよ。

輕 お前達には文明國の作法を知らないだらうから、一つ見せてやら

う、オイうき子此方へお寄り。

輕井はうき子を引寄せ、うき子の頬に接吻せんとす。

輕 あらッ! お止しなさいよ、他人が見てゐるぢやありませんか。

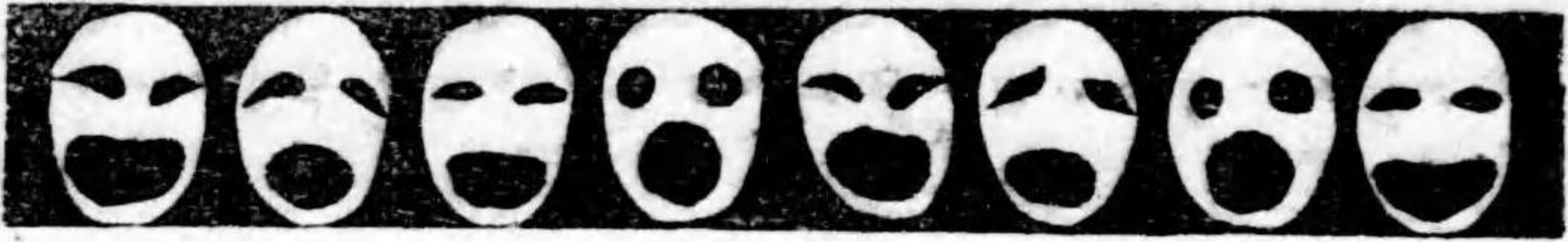
輕 誰が見たつて關ふものか、接吻は即ち愛情の表現で人生の最

も愉快なる最も神聖なるものだ。

輕 だつて體裁が悪いぢやありませんか。

輕 アレいけませんよ。





とうき子接吻を避けんとす。

力藏は輕井の舉動を見居たるが。

カ 旦那、何ですいアノ醜態は、宛然色情狂ですわね。

貞 これ他人さまの事を云ふものぢやありません。

カ だつて奥様あんまり厚顔しすぎますア人をツケ一番閉口ましてやら無くちや……。

貞 頭領、何でも好いちやないか、打捨つてお置き。

カ イ、ヤ何でもよかアありませんや、餘まり失禮でさア……。

と云つて力藏は輕井に向ひ。

カ オイ、ハイカラさん大勢の見て居る面前で、何てへ不様な真似をしなさんだ、紅毛人の國ぢやア何だか知らねへが、この東京にやア他人の面前で、そんなキス／＼なんかするやうな、鈍痴氣



は居やアしねへせ、日本人の恥だから何かそんな事は止めて貰ひてへもんだ。

カ ヤ、こりや驚いた、野蠻極るね。

何だ夜番——夜番だ、何を云やがるんでへ、かう見えても夜番や

火の番するやうな、老碌爺たア譯が違はア、憚りながらポン／＼

ながら、麴町の力藏と云はれちや、警視廳の出入もよく、花井さ

まにも出入して、世人に知られた神田力藏だ、蜻蛉のやうに厭に

頭髮ばかり光らかして、大道を交接で飛びあるく化物たア譯が違

ふんだ、唐變木奴。

力藏は腕をまくり輕井に近づく、輕井は力藏の氣勢に尻込みをする。

花井は力む力藏を宥めて。

花 これ頭領、何したものだ年齢甲斐もない何もお前の事を云つてな



さるのぢやない、失禮な事をしなさるな。

だつて、あんまり小癪にさはりませア。

仕様のない人だねえ、お止しと云つてゐらつしやるのに……。

カ ヘ、ヘイ……。

力藏は忌々しげに腰を下す。花井は輕井に會釋して。

花 何も酒に酔つて居りますので甚だ失禮致しまして相済みません何か私に免じて御宥しを願ひます。

輕 イヤなアに高が野蠻人のとですから、聊かも齒牙にかけては居りません、然し一時は吃驚たです、左様……恰も沙漠旅行中に毒蛇に遇ふたかの如く……。

力 旦那、まだ夜番くく云つてやがるんぢやありませんか。
貞 黙つてお居でといふにさ……。



力 忌々しいなア。

花 何か悪からず。

皆々席に復る、この内堀はうき子と何か打合すさまなりしが、堀は立つて、うき子の傍へ行き手を執つて。

堀 うきちやん、此方へおいで。

うき ハア……。

うき子行きかゝれば。

輕 ● オイく何處へ行く……。

うき 一寸待つて居らつしやいよ。

うき子は流眈に輕井を一寸睨みて、堀と共に此方へ来る。

堀 オイ酷ぢやないか、先刻から俺の方は見向きもせんで。

うき だつて、あのデレハイカラが……。



輕 なんだと？

うき イ、エサ、マア黙つてゐらつしやいよ。

と輕井に云ふ、輕井は好男子然とツンとする。

堀は自分に云はれしと思ひ。

堀 黙つて居なくちや何故悪いのだ？

うき 貴郎のとでなくつてよ。

堀 黙つて居ちや、辯護士は飯が喰へんからな。

うき 飯なんか欲しくないから、何か飲まして頂戴よ。

堀 ム、よし／＼、オイ、ボーイ、酒だ／＼、ビールを待つて來い。

ホ ビールは何に致しませう？

何でもい／＼から旨いものを持つて來い／＼。

ホ ヘイ。



ボーイはビールを持ち來りて洋盃につぐ、堀は自分の手に洋盃を持ち、うき子に飲ます。

うき マア、好いビールだとねえ。

ホ 獨逸ビールで御座います。

うき さうでせうねえ。

貴郎、半分助けて頂戴な。

堀 ム、どれ／＼、ヤこれは甘い。

堀、うき子の兩人は洋盃のビールを飲合ふ。

輕井は其のさまを見て。

輕 オイ、かる次、姐さんを引はつておいで。

と叫ぶ。

輕井の命令にかる次は、うき子の傍に行き。



ひる 姐さん、姐さん。

うき あいよ、うるさいねえ。

輕 オイ、こつちにや上等のカクテイルが来て居るよ。

うき あんな辛いものは眞平。

と輕井に云つて、堀に向ひ。

うき 先生、最少し飲まして頂戴。

堀 ア、いくらでも飲むさ、酔つたら吾輩が介抱してやるよ。

うき 嬉しいと！貴郎は眞實に親切よ。

堀 だからあんなハイカラの方なんか、關はんがいよ。

輕 オイ〜うき子。

うき 今、行きますよ氣が短いねえ。

仲 うきちやん〜。



うき やかましいッ！。

輕井は堪へかねて椅子をはなれ、何か考へたる後堀の傍に進み。

輕 君、君、ちよつと君、君は實に怪しからんですな、僕が玉をつけ

て買つて居る以上は、勿論僕の所有權に屬して居る藝妓を斷りな

く傍へ引附るといふ法がありますか、僕の方へお返しなさい。

堀 なに？……買つて居るから所有權があるとは、君こそ怪からん

と云はれるうき子は一介の藝妓たりと雖も、相當の税金を納め

て、獨立の營業して居る以上は、決して君方の束縛を甘受する義務

を有たん、自分の惚れた男子に向つて愛情を濺ぐ自由の權利を有

つて居るのです、然るにそれを買つたとは何事です？、人身賣買

は法律の禁ずる所でありませぬ、それとも君にして、是非束縛し

やうとするなれば、僕は辯護士の職責として飽くまでも、うき子



のため法廷に立つて、辯論しませう、何ですか？

ヤ一實に何も甚だ以て、蓋し到底度すべからざる愚論だ、僕は決して人身賣買を敢てするとは云はんど、僕はうき子に仍つて一夕の歡を求むべく、一本三十銭といふ線香代の外に、三時間二圓づゝといふ、高い祝儀を拂つてこゝへ連れて來たのだから、僕の招聘時間中は僕の意志に服従させる権利があるのだ。

規

イヤ假へ何と云はれても、人間意志の自由は金錢に依つて左右さるべきものぢやない、抑も藝妓は技藝を賣り、玉代や祝儀を得るもので、決して意志を賣るものぢやない。

輕

だから僕はその技藝を觀るべく彼を……。

堀

技藝をやらして居らんぢやないか。

輕

今、やらせようとして居るところだ。



うき

オイ、うき子、こゝへ來て三味線をお弾き。

お生憎さま、空氣枕は携帯てますが三味線なんか携つてまゐりませんよ。

輕

藝妓が三味線を携つて來んで、何うする？

うき

でも、それが當世のお御客様のお御好みですよ。

輕

イヤ僕はお前を藝妓として……。

うき

貴方だつて矢張色氣一方ですわ……。

輕

つ、つ、つまらんとを……。

堀

技藝以外に君はうき子の身軀を束縛するとは、天下の法律にかけ

輕

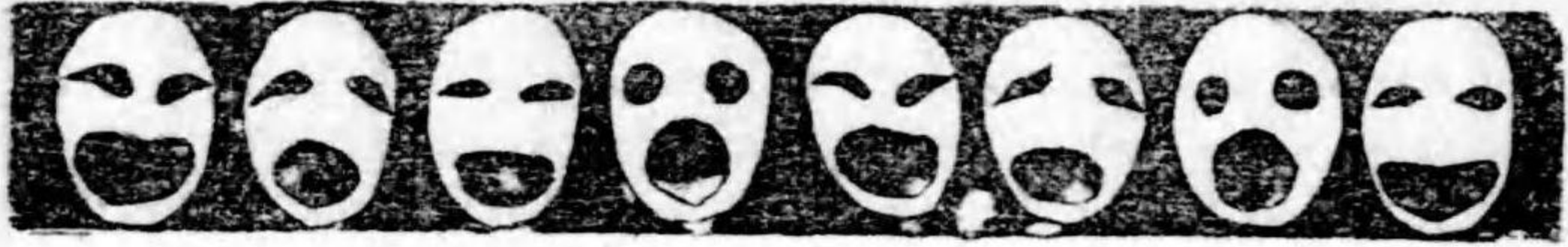
て吾輩が許すことが出來んから、さうお思ひなさい。

仲

そ、そ、そんなとを。

輕

マア大層やかましい、議論ですとねえ。



かる 姐さん、モーお茶屋の方へ引上げませうよ。

輕 イヤ、かうなつた以上は、僕も是非藝をやらせんぢや置かん。

と輕井は力む際から音楽室より起るヴァイオリンの音耳に入りて美しく

輕 丁度ヴァイオリンがきこえる、うき子のヴァイオリンに合して

唄をお謡ひ、それからかる次、お前も踊舞を踊らなくちやいかん

サア直ぐおやり。

かる あらッ！私までお引合ですか。

うき お止しなさいよ、馬鹿々々しい、こんな所で何が出来るもんです

か。

輕 イヤ、いかん／＼僕も意地だ、最非ともこゝへ來てやつて呉れん

ぢや、僕が名譽を失ふ。

かる 姐さん、困つたとねえ。



うき 仕方がないやりますわ、オヤ、何だらうあれは？

かる 姐さん、浮草ぢやなくつて？

うき ア、さうだ。

うき子はヴァイオリンに合せ。

うき うき草や、今日は、むかふの岸に咲く……。

と唄ひ初むれば、かる次は扇子を手にし乍ら立ちて踊りかける。

堀、輕井は、唄ひつゝあるうき子に向ひ。

輕 オイ／＼もつと此方でおやり。

堀 イヤ此方で……。

輕 技藝中は僕の權利だ。

堀 其の代り技藝が濟だら君の權利は消滅するぞ。

と云つて金子は僕の懷中から支出て居るから、君の權利にも屬さ



ない。

堀 それは論ずるまでもない、要は本人の意志にあるのだ。

堀、輕井は議論の花に心傾け、歌舞の終局をも知らず。

通辯増山は唄の終りしを見て、うき子の手を執り、リーペーの傍へ誘ひ来る。

リーペーはうき子の手を握り。

リ Ich Liebe.....

といひ言葉をつゞく、増山はそを通譯し。

増 私は惚れました、貴女が私のいふことを承諾て下さるなら、私即座に百圓出しますが、何ですか？

うき マア百圓！、結構ですわ。

うき子は嬉し氣に、リーペーに寄添ふ。



アーメーはリーペーうき子のさまを眺め居りしが、何に思ひしか通辯加見に嘸きて、卒然立つてうき子の手を執り自分の傍へ引寄せ、何やら云ふ。

ア

加々見はそを通譯し。

加 この中で私が一番貴女を愛する人です貴女が私の意に従ふならばあんな吝嗇の獨逸人と異つて、私は二百圓進上しますが、否ですか？

うき 二百圓ですつて、羨ましいわ。

うき子は嬉しさうに、アーメーにしなだれかゝる。

リーペーは此の様を見て、増山に何か呶く、増山はうき子に向ひ。

増 イヤ貴女は、此方が先口です。



加 イヤ此方が金高が多い。

増 イヤ此方だ。

加 イヤ此方のものだ。

と双方立つてうき子の手を引張り合ふ。

うき ア、痛い／＼堪忍して頂戴よく／＼。

とうき子は半泣きになる。

花井は先刻よりの争ひを傍観なし居りしが、何か叩頭て貞子に呷く、貞

子は花井に會釋し何所へか去る。

力藏も花井と同じく争ひを眺め居たりしが、突然立つてうき子を助け、

増山、加々見を突きつける。

増 何をするのだ。

加 何故邪魔する。



力 邪魔したのが何したんだい、先刻から目撃て居りや、日本人の癖

しやアがつて紅毛人のお髭の塵を拂つて、日本の婦人を玩弄物に

させやうたア何てへ恥知らずだい、己らア手前達のやうに、七六

かしいペロ／＼はやれねへが之でも愛國心つてものがあるんだか

ら、みす／＼國の恥になる事を黙つて見ちや居られねへ、憚りな

がらこのうき子さんを、毛唐人の慰み物なんぞにや俺がさせねへ

から、さうおもへ。

増 オイ／＼生意氣な事をいひなさんな、此方はチャンと百圓といふ

金額で、約束が出来ちまつてるのだ。

加 僕の方はその倍額二百圓で、本人の承諾を得て居るのだ、他から

グズ／＼云はれる譯はない。

増 それとも君が仲に立つなら、百圓の違約金を支出すか。



加 僕の方の二百圓と合して三百圓、目前に出してから話をするが可い。

力 籠棒奴、誰がそんなものを支出す奴があるものかい。

増 そんなら矢張此方のものだ。

加 イ、ヤ此方のものだ。

と双方より引張る。

うき アレ痛つていふのにねへ、かるちゃんもお仲さんも見て居ないで

何かしておくれなねえ。

仲 何か親方、ねえ親方。

かる 姐さんを。

おかるお仲の二人は力藏に頼む。

力 エ、能がすく、サア斯なつたら俺が相手だ、矢でも鐵砲でも持



つて來やアがれ。

と方藏は中央に仁王立になる。

堀 オイ斯うなつたら連帶責任だ。

大いに然りだ、全く日本人の所有權を外人に蹂躪されちや國辱になる。

勿論だ、大に争ひたまへ、法律上の問題なら不肖ながら、吾輩が附いて居るから安心してやりたまへ。

何を云やがるんでへ、ハイカラ野郎に三百屋奴、手前達だつて日本人の面汚し、紅毛人同様の狼ぢやねへか、轉んだら喰ふと思てやがるんだ。まごまごしやアがると臆腹蹴破つて松魚節を突込んで、猫にけしかけるぜ。

何を失敬な。



カ 何でへ。

堀 怪しからん野奴だ、うき子此方へ。

輕 僕の方へ。

増 此方は百圓の代物だ。

加 此方は二百圓だ。

カ エ、三百野郎もハイカラも、紅毛人も何奴此奴の用捨はねへ、この女に指でもさすと承知しねへぞ。

と力藏は力味かへる。

力藏の言葉に耳をかさず、堀、輕井は我物にせんと、うき子の手を執る此方の獨佛人並に通辯等は、堀、輕井にやらじと、之れ亦うき子の手をひく。力藏、かる次、女中はうき子を助けんとし、各互に争ふ。

此の争ひを眺め居たる花井は、徐かに彼等の中に入り。



花 皆さん、マアおまち下さい。

輕 エ、邪魔だお退きなさい。

堀 貴下の關係することぢやない。

花 旦那、何卒止めねへで下せへ。

花 イヤマアお待ちなさい。

つまり諸君が御争ひなさる目的物はこゝに居るうき子さんでせうそ、さうですよ。

輕 それに相違ないです。

堀 その通りで……。

加 それは何しましたか。

此の争ひの解決は當事者以外の私に御任せ下さるなれば、急度公平な解決を見られるでせう。



然り。

それ或は然らん。

では私が調停者たり、仲裁者たるの當然の手段として、うき子をお預りするにしませう、さうすれば自然諸君の争ひも治まり、無事の解決を告ぐる事が出来やうと思ひますが如何ですか？
イヤ、此のうき子は僕が係つて居る以上、當然僕の權利に屬すべきもので、敢て他人の干渉を甘受ない。

貴下は鵲蚌の争ひを見て、漁夫の利を得やうとなさるだらうが、

さうはいかん。

百圓の權利者がこゝにあるのだ。

此方は二百圓で交渉済。

手前達は黙つて居ろ。

花堀 輕 堀 輕 堀 輕 堀 輕 堀 輕

一同

何を！

花 マアお待ちなさい、然らば私は改めて諸君に御披露する事がある
つまり私は彼の女を保護せんため、取致へす千五百圓を拂つて、
うき子を私の保護の下に置く事に致しましたから、左様御承知を
願います。

一同

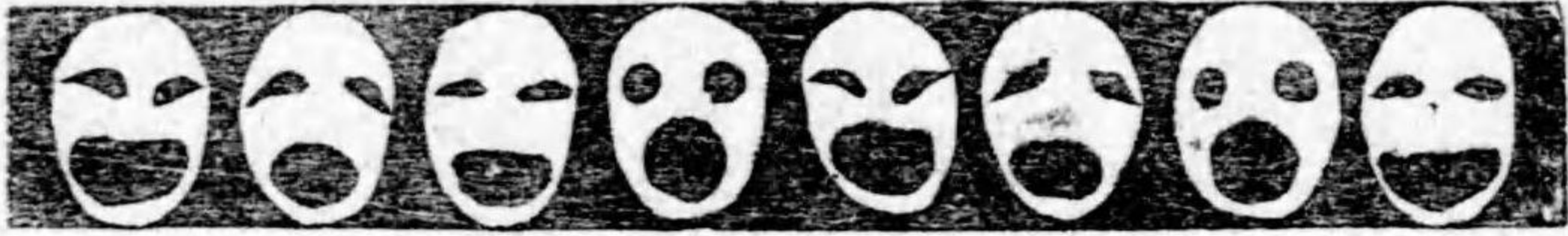
エ、。

うき マア旦那、そりや眞實で御座いますの？

この時うき子の母おさつ、貞子夫人に伴はれ出で來り。

おーうき子や、花井の旦那さまに、好くお禮を申しな、旦那さま
がお前の軀を千五百圓で落籍して下さつたのだよ。
オヤさう嬉しいとねえ、旦那、有難う御座います。
旦那さま妾かうき子の母で御座います、こんな氣隨者ですけれど





未ながくお目かけ遊ばして下さいまし。

貞 貴郎、後日の爲に、この通り受取書を取つて置まして御座います

花井は貞子より受取書を取り、それを諸人に示し。

花 よしく。

何です諸君これで異議はありませんまい。

一同 ム、……………。

カ ヘン、何んなもんだい、旦那の御威勢は素晴らしいものだらう、グ

ツトでも云つて見るが可いや。

一同 グーツ。

うき子は衣紋を直して。

何うも皆さん、先程まではいろく御最負になりまして、有難う

御座いました、お蔭さまで妾も今日から、花井様の圍妾さまです



から、指でもおさしなすつちや困ますよ、宜う御座んすか。

一同 オヤ〜。

うき子は云ひ終つて、更らに、かる次お仲に向ひ。

うき お前輩も之から妾か、引立つてあげるよ。

かる 姐さん、お芽出度！

仲 お芽出度御座います、嬉しいでせう。

うき 前刻初めてお目にかゝつた時から思ふて居た御方の所へ行けるの

だもの、嬉しくなつて何するものかねえ、旦那、何卒何日まで

も可愛がつて頂戴よ。

うき子は戀情を含んで、花井の傍に倚る。

貞子は其の態を見て、少しく色をなし屹然となる。

花井はうき子を突除け。



花 何をするのだ失敬な。

うき エーツ！

花 オイうき子さんも、お袋とやらも誤解しては否ないよ、私は何もお前に惚れた譯でもなけりや、お前を圍妾にせうと云ふのでも無い、如何に稼業柄とは云ひながら、恥も外聞も顧みず、他人の見る面前も憚からずに、日本人ばかりか外國人にまで、婦人の生命とする最も大切な貞操を賣物にして、國辱を曝すを見るに忍びず一時の急を救ふてやつたまでぢや。

さつ 爾んなら此の後、この子の軀を如何して下さるのです？

花 ム、それは今後救世軍へ入れるとも、感化院へ依頼するとも、熟と考へた上適當の所置を取るであらう。

うき でも貴郎、妾が貴郎を戀愛るとは？



花 お黙んなさい！花井實は紳士だ！、私の愛する女は淑徳高い妻、この貞子あるのみだ、お前のやうな汚はしい女に濺ぐやうな戀愛は有ちません。

カ イヨーえらへ！、ヘン素面女め己惚も大概にしねへ。

仲さつ オヤ／＼／＼！

うき 子は花井の言葉を聞き、逆ても及ばぬ戀愛と思ひ自暴自棄となり。能う御座んすよ、澤山お仰しやい、ねえ輕井さん妾の眞實に惚れてるのは、貴郎ばかりよ。

うき 草や今日は彼方の岸に咲かんとうき子は輕井にしなだれる輕井は花井の品性に感じ。

輕 Get-out-way (去れ)

憤然とうき子を突放す、そこでうき子は。



うき オ、さうだつて、妾の好きなのは堀先生よ。
と堀の此方に近寄つて来る。

堀 失敬なツ。

堀も同じくうき子を突放す。

うき オヤー人情知らず、お前さんなんか誰が惚れるものか、妾が眞

實に一身を委せる方は、勇み肌の方藏親方よ。

と方藏の手を執らんとす。

カ 何をしやアがる、色情狂奴ツ。

と方藏はうき子の横面をビシヤリと打つ。

うき ア、痛たくアイタ……お前も話せないのねえ。

うき子は此たびは外人の側に行く。

リ Katze



増 猫奴！

ア Vous  tie une chatte.

加 この泥猫奴ツ！

以前の反動として、堀、輕井、増山、加々見、獨佛人の六人はうき子を突飛ばし、蹴放す。

浮草のうき子は漂ひくって、貞子の保護を受けんと貞子の側に來る、貞子はうき子を憐み庇ふ。うき子は貞子の情にワツト泣伏す。

花 一定の理想なく、確信なきものは實に浮草ぢや、一國としてもその通りぢや。ボーイ三鞭酒の用意……。

一同快然と笑ふ。



四百五十萬圓の秘藏娘

大阪市東區伏見町三丁目に、金貸業慾輪深造と云ふものあり。表に建たる塀の高さは利息の標準を示し、格子戸の取扱細やかに光りて見ゆるは主人深造の頭も斯くやらんと聯想れて可笑し。

主人深造は奥の一室に机をひかへ、帳簿披見つゝ算盤の手忙し。

深造、お鍋く、闇黒なつて来たから、緩々急いで洋燈に火を點して持つておいで、わかつたか？、それでは——三五十五、一三が三か：



下婢お鍋は臺所より飛んで出で、鈍狂な聲にて。

お鍋、旦那はん、緩々急いでと仰しやると、お鍋には急ぐのか急かぬのか不解まへん。

深造、ヤレく傭人を使用へば苦をつかふぢや。

と獨語きつゝお鍋に向ひ。

深造、緩々急いでといふたのは、取扱を叮嚀に——注意する事ぢや、而して火を點せば急いで火屋をおさしと云ふとぢや緩々叮嚀に扱ないと洋燈を破損す、破損しや忽ち私の損失じや、火屋を急いでさゝないと油煙で座敷が汚れるぢや、一六の縁夜道修町に出す植木屋の顔を見なされ、空氣流通よい道路に居てさへ、油煙で顔面が黒うなつて居るぢやろう。

お鍋、へい——それでは緩々急いで致しませう。



お鍋は立つて臺所より洋燈を携來たりて。火を點さんとし過つて火屋を破壊す、深造は算盤を机の傍に投げるやうに置きてお鍋に近づき。

深造 ヤレく勿體ない、これじやから叮嚀に注意して、緩々急いで扱なされと云ふたのじや。

ア、勿體ない、これも金銭の斷片ぢや勿體ないく。

深造は火屋の破片を拾ひ集めつ。

深造 ヤレく勿體ないく、これお鍋、早く洋燈の火を消しなさい、

火屋がないから油煙が出て居るがな、ハレ厄體もない命加のほど

が怖しい、南無阿彌陀佛く。

深造は愚痴たらく、お鍋は直立て阿呆笑ひ。

深造 茲所へ来て早く破片をお拾ひ………あッ痛いく。

深造は硝子の破片にて誤つて指を切る。

深造 ア、痛いく。

と大聲あげて叫ぶその聲を聞きつけ、娘お花走せ來たりて。

お花 お父さん、何う遊ばしたの？あらッ血が流れて大變だわ。

お鍋、早く横町の屋満井養民先生を………

お鍋 直ぐ呼んでまゐります。

お鍋出で行かんとすれば、深造は狼狽て。

深造 行くなく、醫師を迎へたら金銭が要るそんなもの呼ぶなく。

お花 では、お鍋、指薬を購ふておいで。

深造 何をいふのじや勿體ない賣藥ぢやて………

深造は指を丸くし。

深造 金銭じやく、買はいでも可いわい、ア、勿體ない、一滴の血を殖すに何斗といふ米が要ると醫師から聞いたが、ア、勿體ない、こ





の血は紙で拭くのも勿體ない甜めて置ませう。

お花 お父さん、そんなとを遊ばすな、そんなになさらないでも、財産は失くなりや致しませんわ。

深造 ヘッ！マア何を云ひなさる譯もないとを……

お花

だつて、妾は學校で物質の形狀は化學的變化をするが、原素は決して減なるものでないと教はりましたわ。

深造

マア厄躰もない、小女にそんな無茶なとを教へるとは、もう女學校へ行きなさるな、ヤレ／＼怖しやの。

私は學校なぞへ行かぬけれど、活學問をして居ますちや、だから何んでも彼んでも眼につきまます。

お前面のお常さんなどは、お前と異つてお賢明わい、その證據は四五日前から、大金儲をしやうとおもふて、天文を考へて居なさ



る、お父さんはチャンとそれを觀破て居ます。

お花

お常さんが天文學なぞ御覽なさるものですか。

深造

流石に十九歳では少女ぢや、あれが眼につかぬわい、

お常さんは四五日前から、歩行にも大空を眺めて御座つて、首を拵て天文を考へて居なさる。

お花

オホ、お父さん、そりや天文學を考へてお居でなくて、四五

深造

日前から顎下腺炎といふ喉の病氣にかゝつて居らつしやるのだわ
オヤ／＼さうかい。

二

深造は娘お花の言葉にさては自己の誤認なりしかと、一たびは氣附かざるにもあらざりしが、貪慾の黒雲襲撃きて眞如月は光輝を放たず。



深造 さうぢやないく、お前がの顎下腺炎とやら云ふて居るは、お常さんが額價千圓ぢやと云はれたを、誤聞たのぢやイヤそれに相違ない。

深造は言葉を断ち、暫らく考へて

深造 こ一つと……額價千圓といふのでは、株券かな？公債かな？ハ、ン了解つた！社債ぢや、それに相違ない……さてそれとして何社の社債か知らん、それさへ了解りや一番此方が先へ廻つて金儲けしてやるにな。

お花は實父の強慾に呆れ。

お花 お父さん、お常さんは事實御病氣なのですよ、お父さんはお慾が深いから、屢々事情をお誤認なさるわ。

お鍋はお花の語尾を捕へて、厚き唇をつき出し。



お鍋

嬢はんのおいひやす通り、旦那はんは貧慾だすわ、そやさかい近隣で待遇が悪ふおますせ、昨日も裏手の林さんへ行て、大根師をお貸しやお呉れやすと懇願したら、書生さんが「君は慾輪の下婢お鍋君だな、君が慾輪の下婢でないなら敢て貸すを辭せんが、慾輪深造そのものに直接は勿論のこと、間接にもせよ、貸すとは出来ん、歸つて主人たる山椒太夫へ、大根師は貸せば消耗から、貸與へるとはならんと云へ」と云はれましたわ。

深造

そんなと云はれた位、何の事はないぢやないか、お前にペラ／＼六ヶしい叱語をいふた書生は阿呆ぢや、なんと阿呆ぢやあるまいか、ペラ／＼饒舌れば腹が空るわいアハ、ハ、ハ、どつこい乃公も笑ふては腹が空くわい。

お花

お父さん、妾が生涯の願ひですから少し我慾を脱れて下さいな



深造 何に？我慾？このお父さんが我慾！娘——お花、マア考へて見て呉れ、乃公に我慾があらうかい、乃公のやうにして居つて、お前までに我慾と云はれては立場がない、親の心子知らずとは好く云ふたとぢや、乃公位慾のないものが現時あらうかい、世間の父親は女房があつてさへ、ヤレ藝妓ヤレ娼妓ヤレ圍妾のと、種々な婦女を手にかけて居る、それに乃公は後妻も娶らず、儉約して婦女に手は出さず、適に手をつけるは鈍ぐらゐぢや、そんなにしてウント金銭を貯蓄るのは何の爲ぢや、乃公が死ぬときこの財産を携帶て行かれるかい、千兩箱は富士の山ほどあつても冥土の土産になりはせぬぞよ、悉皆お前に譲與つて、一枚の經帷子に穴錢僅々六文——その六文も乃公は正貨を持つて行かん、文久錢に印肉をつけて白紙に六つそれを寫して持つて行くのぢや。

深造はトある帳簿を取り出して披見し。

深造 概略拾參萬六千貳百九拾四圓八拾七錢七厘といふ額を、お前に譲つて行く乃公は氣の大きな慾のないものぢやないかい、それでもお前は乃公を我慾ぢやとおもふか？

お花 そりやさうでせうが、お父さんはあんまり家外の人に我慾ですわ過般も孤兒院の孤兒が摺附木を携帶て來たときお父さんは火附が可か試用で見ると云つて、孤兒を待してその摺附木で竈の火を點け、風呂の火を焚け、その上煙草に火をおつけなさつて、ブカブカお喫なさつた上、この摺附木は品物が可くないから買へないつて、可愛相に孤兒をお歸へしなさつたぢやありませんか。

深造 そりや謝絶しました、それは孤兒院ぢやから寄附して呉れいといふのなら、直時拒絶ぢや——で孤兒を待たしはせぬ、乃公ぢやつ





て彼な貧乏人を、一分でも我家へ置くのは心配ぢや、何か盗まれはせぬかとおもふてな。

お前は可愛相ぢやといふけれど、元來摺附木を買ふて呉れいといふのぢやで商賣ぢや、商賣とすれば物品の善悪代價の高下を考へるのは普通ぢや……

深造は何やらん言葉を續けんとする際、表手口に「電報」といふ聲きこえぬ。

お花 お鍋……あらッお鍋、居睡して否だね。

深造 お鍋、電信ぢや。

と揺り起せば、お鍋は鈍狂聲にて。

お鍋 地震だすと？、なるほど身體が揺れたとおもひました、大變なとや何しませう。



深造 地震ぢやないわい電信ぢや、電報ぢや早く表手へ行つて受取つて来い。

お鍋は表手の室へ行き、一通の電報と領收證を携へ來り、深造に渡せば深造は取る手遅しと電報を披き見て。

深造 娘——お花、悦べ大金儲が湧いて來た芽出度く。

三

深造は電報を眺めつゝ嬉しげに我手で自己の禿頭を叩き。

深造 大金儲ぢやく。と叫び喜悦べど、お花お鍋は對河岸の群集がさゝやき笑ふを見るが如く何事か了解ねば平氣なもの。

お花 お父さん、何がそんなに御芽出度の？
深造 これが芽出度なうて何が芽出度からうぞいハ、ハ、ハ、。



お花 その芽出度譯を……………

深造 その譯は……………

お鍋 金満の後家さんが、旦那はんの後妻さんにお越なさるのだすやろ

深造 エイ何で其方が解つたとかい、何も解りもせいで。

お鍋 解つて居ます、解つて居ればこそ斯して旦那はん……………

深造 無用語をいふな馬鹿女——

お鍋 イエ云ひます。

深造 云ふなと云ふに。

お鍋 決して云ふて呉れな、何卒娘へ内密でと仰しやつたことを云ひます

深造 ア、コレく何卒それだけは云はずに。

お鍋 イエ私は馬鹿——馬鹿女——馬鹿といふ海布、羊栖菜、昆布でお
ます、何せ海洋の底に沈んだやうに、浮ぶ瀬のない體でおますさ



かい、云ふてく云ひまくります。

深造 そんな無茶をいふては、如何もならん馬鹿ぢやないから云ふな、
な、な、了解つたか。

お鍋 イエ了解りまへんさかい云ひます。

お花 お花は父とお鍋との間に何等かの秘密あるらしく聞ゆるものから。

お花 お鍋、お父さんに遠慮しないで、私におはなし、さ、何したの？

深造 お鍋が言葉争ひなし居るところへ、出入の貸金周旋人粕利鳥三、案

内も乞はず入り來つてお花に會釋す。

深造 お鍋は争論に粕利の來りしをも知らで。

お鍋 過日わたいが衣裳藏へ入りますと。

深造 そ、それを云ふては否ん。

深造は手を以てお鍋の口を塞がんとす、お花は深造の手を取り。



お花 お父さん、お手をお出しなさつては宜くありません。
さ、お鍋、おはなし。

お鍋は百萬の味方を得たるかのやうに勇み立ち。

お鍋 これお鍋、娘に知れると大變ぢやさかい内密で……

粕利はお鍋の言葉をさよ。

粕利 平常から石部金吉ぢやおもふて居たに、石や鐵も矢張り缺たり
錆たりするものぢやアハ、ハ、ハ。

お花 お父さんも老年をして、人もあらうにお鍋に……

深造 お鍋のいふとは嘘ぢや、信用するな。

粕利 何ぞと旨く誤魔化さうと。

深造 ヤ、これは粕利さん、何が誤魔化すぢや。

粕利 お鍋どんか旨く誤魔化すのでせう。

深造 さうぢやとも、お花お鍋は嘘をいふから相手にしなさるな。

お鍋 わたいが何を誤魔化しました、何を嘘をいひました。

嬢はん、わたいには證據がおます、嘘とおもやすなら、衣裳藏へ
入つて……

深造 エヘン、オホン、双子織を一反購ふて與るから、それを云ひなさ
るな。

お鍋 双子織を一反!

お鍋は双子織一反と聞て口を閉んとす。

お花はお鍋に向ひ。

お花 私に話せば綿風通織を一反購つて與るよ。

深造 此方は秩父縞一反ぢや。

お花 私は米澤織を。





粕利 それへ私が帯締を一つ添へてあげる。

お鍋 そんなら云ひます。

深造 仕様のない阿呆じやな。

お鍋 阿呆でも慾は知つて居ます。

お花 嬢はん、旦那が貴女はんに内密にして呉れと頼まはりましたは：

お鍋 頼みなさつたのは？

お鍋 貴女の御不在に婦人……

深造 いふなッ！

と深造は氣をあせるお鍋は平氣で。

お鍋 婦人の衣裳を三箆筒、抵當にお取りやして、それを貴女はんにい

ふと欲しがるさかい、決していふなと云やはりましたのだす、嬢

はん、粕利はん、米澤と帯締を何日お呉れやすのや？、何やつた



粕利 ら正金でお呉れやす。

これは驚いた、流石に石部金吉が石部金吉なら、お鍋もお鍋じや

わい。

お花 お父さん、そんな何を何故おかくしなさるの？、私は貴父の實娘

でなくて。

深造 そんなに怒りなさるな、これからは決して内密にはせぬ。

お花 では先刻の電報は何です？

深造 電報はお前と許嫁になつて居る、金井持太郎さんの御實父さんが

逝去なられた報知じや。

お花 それが何故大金儲で御座います。

深造 百何萬圓といふ財産が、お前の婿さんのものとなつたのだから、

大金儲じやあるまいか。



斯なると横井の息子を拒絶つて、一日も早うお前と持太郎さんと
婚禮させねばならぬ、ア、芽出度く。
と深造は獨りホク／＼悦ぶ際から、横井の息子戀次郎ツカ／＼と入り來
りぬ。

四

深造は入り來りし横井戀次郎を見て、手早く電報を袂に隠し。

深造 これは横井さんよう御越なされた、ニコ／＼して御座るは、何か
旨い金儲が御座るかな、平常からの馴染甲斐じや、半口乃公に乗
せて下され。

平常からお花にも話して居りますとちやが、横井さん——貴下の
やうな御方の御妻君にならしやる方は、果報ぢや——幸福じやと



申してな、ちやから何でも美貌お嫁を周旋せにやならぬと、心懸
けて居ますのぢや。

お花を戀慕して居る横井は深造の言葉を聞き、稻を植ゑて麥が生へた思
ひ。

横井 慾輪さん、私は兼てお話し申上げた……お——は——
と眼にてお花と、深造に知らず、深造は故意と素知らぬ顔。

深造 お花も何でも貴下にとおもふてな……
横井は豊作を得たる百姓の如く、ホク／＼と悦び。

横井 で御座らう、人間の精神といふものは、相手に通じるもので御座
るな一心巖をも通すと申しますもの。

横井は獨り悦に入る。
深造 ……誰が適當ぢやらう？。彼女か？此女か？、お前面のお常さ



んが？……

横井の心中は明日稻刈りといふ前夜、洪水に嵩地の堤防が破壊さうな思ひ、サア土俵じや、釣鐘よ法螺よ——村中總出で用愼せいと云つたやうな騒ぎ。

横井 慾輪さん——貴下がお——お花さんを……
と云はんとするを深造は云はせず。

深造 お花も矢張さう申して、心配致しまして諸所方々を……
といふ言葉も耳に入れず。

横井 ………であつたから私は父へも母へも、親類朋友その他出入のものへもそのつもりで……

深造 お花が何ぞ致しましたかな？

と深造は横井の苦心を見ると對河岸の火事を見る如し、横井は深造の冷



やかさに火災保険を附け置かざりし商品に火が移りし程の思ひを爲し。

横井 今更らそんなことを云はれては……
深造 お芽出度とちやで、乃公が仲人せずとも御祝儀だけはウント立派に致しますぢや。

横井は洪水に流されたる人の何か浮木にありつかんとあせるが如くお花に向ひ。

横井 お、お花さん、貴女は何か私のとに就いてお父さんからの御聞きなされたことが御座いませう。

お花 私は何にも存じません。

浮木とおもひしは壁の斷片、手をかくるとそのまゝ沈みぬ横井は止むなく再び深造に向ひ。

横井 それでは全く私慾のためか、慾輪さん貴下は私を罵鹿になされた



ですな、お花さんを利用して。

深造 何の貴下を阿呆に致ませうぞい、貴下と乃公の間に言葉の充分通じて居ぬとがあるらしい。

横井 あるらしいとは圖々しい。

深造 マアさうお怒りなさらずと、今日はお歸宅なされ、乃公も老年のとちやで、忘却たともあるかも知れぬ、で一兩日のうちに考へて置きませう。

横井 考へて置くも宜くも云へた、この上は私も男子の意地ぢや——と云ふた所で……

横井は夜襲せんにも敵陣の在所の知ぬ體、そこで横井は執念深くお花に

横井 お、お花さん、貴女は人情を御承知でせうな？

横井の言葉を深造は引取つて。



深造 二挺といふと鼓でせうな、彼女は胡弓は習ひましたが鼓はな……

横井は深造の愚弄を怒りしも。

横井 今日は何も申しますまい、慾輪さん失禮……

深造 やれ〜お歸宅かな、二三日の内にお出でなされ。

横井は深造に翻弄せられ忿怒の熱に包まれつゝ出で行きぬ。

お花は先刻より父と横井の談話をきゝ居りしが、何やら我身の上おもはれて、氣が氣でなく。

お花 お父さん、横井さんは何故あんなに御立腹なされたの？

深造 あれは病氣ぢや、熱の高い病氣ぢや。

お花 お醫者さまでも有馬の温泉でも、チヨット全癒らぬ病氣ぢや。

お花 そんな病氣が御座んすの？

深造 あるとも〜。



あるともくと云へば、兎角故障は起りやすいものぢやで、故障の出ぬ内にお前と金井持太郎さんとを一刻も早く婚禮させやう。

お花 アノ許嫁の……

深造 さうぢやなくで善は急げじやから今夜の夜行で濱松まで行つて、

一日二日海水浴をした上、東京の金井さんへ行きますやう。

お鍋、出立の用意をしてお呉れ。

深造の突飛の出立にお鍋は狐につまゝれたらんが如き思なり。

五

悲惨なる戀情の腥血に肥えし草——繁りし野原の梅田も、進化てふ西洋の鋤に耕耘されて、鐵條を植ゑられ基石を蒔かれ、一年一度咲く蓮華草に浪速の子女の脚を曳きし昔時かはりて、現在は時々刻々幾百——千萬



人の足跡に地は固まりて、昔時の面影何今所？

こゝ停車場の一二等乗客待合所、幾多の乗客のその中に、慾輪深造は娘

お花を連れ、古びし黒鞆片傍に引据ゑ「はぎ」をスバク吹しつゝ、東上

列車の到着を遅しと待合す、深造は煙筒を納めて大欠伸。

深造 かうやつて待つて居ると、汽車もナカク遅いものぢや。

梅田も現今こそ斯ないに立派になつたけれど、乃公の青年時代は

この邊は一面野原で燐火が出たものぢや、それでこの西の方に埋

葬地があつて、それを梅田の墓地といふて、大阪一等の墓地ぢや

つた、而してその墓地は梅田宗庵といふ人が所有て居たのぢやが

財産家であつてな、實子が二人あつて、一人は男子一人は女子——

それがナカク別嬪で——丁度お前のやうぢや。

お花 お父さん、そんなことを……



深造

可えわい、お父さんのいふとを黙つてきけ。
乃公はその頃お役人ぢやつた、このお父さんは青年期から豪いものぢやつたらう。

お花

お父さんがお役人？

深造

さうちや——で役柄で度々梅田宗庵の庵へ行つた。

お花

何のお役で？

深造

總年寄……今でいへば市長じやな、その頃の總年寄などは大したものだな一寸變應といへば新町の折屋——それから吉田屋ぢやそれでその費用は總年寄の自辨ぢや、昔時の總年寄などは現今の役人のやうに、ヤレ日當ヤレ傳賃なぞと吝嗇なとを云はなんだ。
それでお父さんが、その總年寄だつたの？
總年寄の有方ものは今井さんぢや。

お花

深造



お花

ではお父さんは？

深造

乃公かい、乃公はその今井さんの命令で、宗庵の庵へ使に行つて宗庵から三匁目づゝ金錢を貰ふたのぢや。

お花

ではお父さんはお役はお小使？

深造

昔時は小使なんていふものはないわい。

お花

それでは何に。

深造

下役といふたのぢや。

お花

それでは矢張小使ね。

深造

阿呆——お父さんを小使なんていふ娘が、世界にあらうかい、藝妓のやうな口の善悪ないものでも、情夫を小使といひはせぬぞよ兄さんといふて居るに、生娘だてら口の悪い、持太郎さんに愛想を盡かされたら何とする、百何萬兩といふ財産は他人の所有にな



つて仕舞ふぞ。

それからと……この西方に閻魔さんがあつた、五間四方の堂の内——つと——その閻魔さんは四尺五——六寸もあつて立派なものちやつた、それでその宗庵がその土地を高う賣つて、金銭をウンと蓄め、高麗橋へ道具店を出した、我家の裏手の高麗橋筋の北側へ出して、それでまた金を儲けた、商賣は何であらうと金儲をしたから豪いが、六七年前大損をして、現在は何所に御座るやら不明らぬぢや、ぢやから矢張お父さんの方が豪い。

話す際から神戸より東上列車着きければ、深造は鞆を抱へ片手にお花の手を曳き「御免なされ〜」と云ひつゝ場内に入りぬ。

六

同じ梅田停車場の、上り三等乗客待合所へ、慾輪父娘より十分ほど遅れ横井戀次郎、柏利鳥三の二人俤にて走せ來り待合所の内に入りしが、並べし腰掛空所なきまでに、腰を下せる多數乗客の顔をキヨロ〜眺め、思ふ人のあらざりけん、二人は入口に近づきて。

横井 鳥三さん、眞實に慾輪さんはお花さんを連れて、その許嫁とやらの金持とかいふ男子と至急に婚禮させるため、東京へ行くのか？
柏利 若旦那、眞實ですとも。

横井 それなれば今後の夜行に乗るため、この三等待合所へ來る筈ぢやに……

横井は太き金鎖を附けたる金側時計を、帯の間より取出して眺めつ。



横井

發車に十分しかないに、來ないのは？鳥三さん、君が嘘を云ふて僕を翻弄にして居るのやないか。

鳥三

若旦那、私が何しに貴方に嘘を申しませう、欲輪さんは確に夜行で東京へまゐります、併し二三日は濱松に接近——何とか云ふたけ……さうく辨天島の海水浴場に滞在するさうです。

横井

何うだかな？

粕利

それに相違ありやしません、私がお鍋に……双……綿風……秩……さうく築澤織一反と帯縮一筋購ふて與つてやうくそのことを聞いたのです、今日は米澤織と帯縮ばかりですが、平常からお鍋へ、ヤレ一六の縁日じや、ヤレ老松町の夜店じや、ヤレ地藏尊のヤレ闍魔さんぢやと、二せ……イヤ二十錢三十錢——五十錢と度々與つて居るのです、それ位の運動費を出さなけりや、

横井

お鍋がナカく阿呆慾で味方になつて呉れませんのです。

粕利

そんなに運動費が要つたかな。

要つたかなとは恐れ入りましたお言葉ですな、自分の利益でなく一般の國民の利益になつてやる、議員になるさへ運動費が要る辛い時節に、アノ美しいお花さんを手に入れるに、運動費ぬきで行れますかいな。

横井

そりやさうだ、然し君が僕に相談しないで、帯縮位は購ふて與つたか知らぬが米澤織を購ふたとは思はれんな。

粕利

思はれんなぞと仰しやつたとて、事實購ふて與つたのですもの、そんなに運動費を使ふて可かんと、仰しやるなら私は運動は出來ません

一つ間違へば金儲をさして下さる、資本主の慾輪さんを失敗るの





ですから、今夜限り運動は御免蒙ります……

横井は粕利が「運動を御免蒙る」と云ひしより、色慾の弱點は横井を弱からしめ。

横井 そ、そんなことを云ふては……

敵の虚を突くは兵家の秘決と。

粕利 で私が支出した運動費も頂戴致しません

横井はイヨ／＼狼狽て。

横井 何も運動費を出さぬといふのじやない兎も角も五十圓即時渡して

置から

横井は懷中より紙入を取り出し、その内より五十圓出して粕利に與へ。

横井 これで君を不信用して居らぬとが、明了だらう、マア怒らないで盡力して下さい



粕利 さう仰しやれば私だつて、貴方のため盡力しますとも、一生懸命で

以て。

横井 有難い。

それはさうと慾輪父娘は何うしたのだらう？、僕は心配でく／＼ならん、僕へは二三日の内に来て呉れと、云ふて、油断さして置いて東京へ行くのかも知れんな。

粕利 彼の老爺のとですもの、それ位の事は行りかねませんよ、昨年も神社で寄附を募つたとき、彼の老爺が云ふに、この神社に寶物らしいものがない、のみならず、マリ流行らぬ神社じやから、保存のため献金する人は少ない、献金が少ないのに費用をかけては、經濟が立つまいから、神社のためじやで、私が五百五十圓出金して、ポツ／＼寄附が集まれば、それで返戻して貰らうとにしませ



う、外ならぬ神社の事ぢやで一奮發しませう、寄附が集まらなかつたら私が損失をするまでのとぢや。と云ふて……

横井

ナカ、く、信心の厚い男子ぢやな。

粕利

私はじめ皆さんも、さうおもひました——で、ぢや慾輪さんにお委せ致しませうと委しました、すると老爺さん直刻その場で五百五十圓の銀行小切手を書いて渡しましたで神社の世話方では有難いと、神社の修繕にかゝりました。

横井

マア好都合ぢやつたな。

粕利

ところが親爺さんは、自分が抵當に取つて居る應擧、雪舟、一休親鸞上人などの書畫を、神社の社務所へ陳列して、それが神社の寶物であるやうなないかのやうな怪しげなことを云ふて世人に見せ、而して寄附を募り、千六百圓ほど集めました。

横井

ナル程巧いな。

粕利

ところが旨くないのです、老爺はその金額は私が五百五十圓で受負ふたのぢやと云ふて、自分の懐中へ入れて仕舞ふたのです、神さんを好餌にして利を得た老爺さんです。

横井

さうかな、そんなとより僕は父娘が來ぬのが氣になつて……

もう夜行が發車しかゝつて居る、兎も角ブラットホームへ入らう二人は入場券を求め入場すれば、上り列車は動きそめぬ、二人は列車の走するを眺めつゝありしに、二等客車の窓より慾輪は頭を出しぬ、二人は慾輪の顔を見て。

横井

ヤーツ！

粕利

仕舞つた！

と二人は叫ぶ。





七

轟々と走る汽車の窓から、濱名湖を眺める青年は「水の上の濱名の橋もやけにけり打消す浪もよりこざりけむ」と詠じたる和歌を、古人の愚痴と笑ふなるべし。

西洋文明の風吹きて、世上は兎角黄金次第となりぬ、電線も金属——汽車の線路も鐵——その上を走る車輪も鐵——その車軸も鐵！それ見さつしやい、西洋のものちやとて矢張辛棒は金じやと教へてあるわい、と解した故にや、辨天島停車場が設置せられてより附近の次郎も太郎作も甚次郎左衛門も、金錢が欲しさに建てた海水浴旅館——數ある旅館中辨天樓と呼ぶは、客待遇丁寧なりとの噂高く、樓主が「間數少なくて」と脚つと屢々なりとか。



樓の玄關へ即今着きし二人の紳士客あり。

客甲 オイ、誰か居らないか？、返答のないは奉公人根性とやらで、白晝から思案最中と見える。

客乙 オイ——誰か来ないか。

客甲 來客の大聲耳に入りけん、番頭は出で。

番頭 入らつしやいませ。

客甲 と叩頭して頭を上げ來客の顔を見て。

客乙 オヤ笑井の若旦那ちや御座いませんか、毎々御引立を蒙りまして、有難ふ御座います、今度はお連れさまとは……

笑井 さうだ、これは私の親友で麴町二番町の金井持太郎君といふ紳士じや。

客甲 金井君、これが當樓の番頭で平造といふものです、自今引立てや



つて呉れたまへ。
金井 御多忙らしいに御邪魔ぢやが、湖面を眺めて兎も角、中食を喫めたい。

香頭 へい〜。

笑井 オイ番頭、昨年の暑中僕が居つた座敷ね、あれは眺望の好い室だから、それへ案内して下さい。

香頭 お生憎さまですが、彼の座敷は昨朝から御來客で……

笑井 來客だと？それは何者だ？

番頭 吝嗇らしい御老人……

笑井 そんなものなら座敷を替つてもらへ。

番頭 ………とお嬢さん。

笑井 何に！お嬢さんと、何歳位のお嬢さんだ？



番頭 十八九歳で御座いませう。

笑井 十八九歳！妙齡だな、然し姿色は如何だな？

番頭 決して悪いと申すやうな御姿色では御座いませんな。

笑井 決して悪いといふやうな姿色でない……

笑井 笑井は頭を一寸傾け。

笑井 決して悪いといふやうな姿色でない……とは、要領を得たやうな、得ぬやうな言葉だ、平造其方はナカ〜外交官的の智識を具備へて居るわいアハ、……

八

金井 ナル程さうですね。

笑井 番頭の所謂決して悪いと申すやうな御姿色でない、お嬢さんがあ



番頭　りとすればそのお嬢さんに對して、座敷だけはその隣室にしよう
それなれば空間で居ります。

笑井　而してお嬢さんといふは何處のものだ？、東京か？

番頭　大阪で御座います。

笑井

大阪——上方だな、金井君、僕はそのお嬢さんなるものは、必らず美人で而して優しいと思ふよ。

オイ平造、今晚僕等は宿泊するよ、事と品に仍ると、一週間——十日——一月も滞在するかも知れない、そのお嬢さんの姿色と、滞在の都合で……だからそのつもりで居つて呉れ。

何だつたら僕の宅へその電報を打つて置いて呉れても可い、イヤそれではアマリ早手廻し過ぎるかな。

番頭

へいへい

と答へ番頭はニタ／＼と笑ふ。

笑井　そんなに笑ふな、何がそんなに可笑いか。

笑井は金井に向ひ。

金井君。君は大阪の許嫁の許へ行かれるのぢやから、愉快でせう。

笑井

それほどでも……

金井

ないとは云はさぬ、君はニコ／＼喜んで居るぢやないか。

君のやうに負惜をいふのは好くない、だから淡白嬉しいと云ひたまへ、君、君、さう云つて呉れたまへ。

笑井

何故？

金井

何故つて君と僕とは親友ぢやないか、小學、中學、高等學校に居つたとさから苦樂を共にして居つたでないか、僕は何時も試験前は君から教へて貰つて居つたでないか、そればかりでない、僕が親





父に叱られて、小遣錢を貰へない時は、君が僕に小遣錢を呉れたでないか、それにまだあるぞ、僕が議論に敗たときは、君が僕に代つて相手を攻撃して呉れた、爾く君と僕とは苦樂を共にして居るんだもの、君が許嫁の許へ行かるゝにも、僕が同行して居るのだ。

金井は笑井の言葉聞いて獨り打ち笑ふ。

笑井 僕は君を實兄イヤ——僕が年長だから、實弟とおもふて居る、だから君の芽出度ことは僕も芽出度——だから君の御芽出度を半分僕に呉れたまへ……と云つて君の許嫁の身體を半分呉れたまへとは云はぬ、云ふた所で實行へないとだから、君、君の御芽出度の半分を僕に與ふべく番頭の所謂決して悪いと申すやうな姿色でないお嬢さんに交際するを補助て呉れたまへ。

九

濱名の水面に細鱗跳り、綠松繁りて砂地白く、月光漏る樹間の彼所此所に、設けし腰掛は納涼に佳し。

金井持太郎は慾輪の娘お花と、唯だ二人腰掛に腰を下し、月光を浴びつゝ何やら密々語りつゝあり、さては彼等は許嫁なれば、嬉しき戀愛を語りつゝあるにや？

金井 ……では貴女が慾輪さんのお實娘さんですね——お花さんですわね？

お花 さうで御座います。

金井 では貴女は私の……イヤ私の存じて居る麴町二番町の金井持太郎さんの許嫁のお花さんですね？





お花 エーツ!

お花は三越呉服店の陳列場にて、化物に出會たるかのやうに打ち驚き。

お花 何して貴方がそれを………?

金井 熟知て居る筈です、私は即ちその本人金井——さんの親友でも

の、何日も本人から貴女のことを承はつて居りました。

お花 さやうで御座いますか、貴方は御親友で居らつしやれば、金井さ

んのとを宜く御承知で御座いませうね?

金井 知つて居ますとも、私は金井——さん本人が自身を知つて居ると

同じく、知つて居りますよ。

お花 大層貴方はお詳しいのね、では失禮で御座いますが、私がお尋ね

申すことを何でもお答へ下さいませんでせうか。

金井 何でもお答へしますとも。



お花 有難ふ御座います。

ではお尋ね申しますが、金井さんは私をお嫌ひでなくて?

金井は冷酷なる高利貸が、未だ朝寝の夢さめぬ枕下へ、鬼權殺害の號外

を投込まれるかのやうに狼狽て。

金井 何して私——私の親友の金井が貴女を嫌ふものですか、金井は貴

女を戀慕して居ます、殊に貴女を一目見てから………

お花 金井さんは私を御覽なさつて?

金井 見ました、確に見ました。

お花 何處で?

金井 こゝ………イヤ夢で見たと云つて居ました。

お花 オヤ! 夢——夢ですてホ、……貴方は面白いことを仰しやる御方

さまですと、ホ、ハ、ハ。



お花は面に笑を湛へつ。

お花 夢とは、夢のやうで御座いますね。

金井 夢のやうだと仰せになつては、何だか確としないやうですが、夢にも種々ありまして、虚夢、正夢——金井の夢は正夢ですから確實です、私がそれを保證します、私の保證は本人金井と同一です。

お花 貴方は大層金井さんに御親切ね。

金井 そりや私と金井は離れられない間柄ですもの。

お花 それはさうと金井さんは、何かお嗜好が御座いませう。

金井 ありますよ。

お花 何な？

金井 第一が讀書です。



お花 讀書！私は讀書する方は好まません。

金井 とは何故？

お花 何故つて、讀書する方は書籍に意をお入れなさいますから、自然と妻へ愛情が薄くなりますもの。殊に哲學などを研究なると猶更薄くなります、ですから私は否やよ。

金井 金井は哲學などは口にも仕ないです、本人の讀むものは小説です

お花 小説——それだつて、矢張………

金井 否ませんか、それぢや本人は小説を止めます、貴女のためなら。

お花 眞實に御親切な方ですね。

金井 金井は親切な男子です、殊に婦人に對して親切ですよ。

お花 そんなに婦女に御親切なのですか。

金井 親切ですとも、原來愛情の深い男子ですから、婦人が悦びまして



ね、御婦人二人も金井を愛して居ます。

お花 婦人がお二人も金井さんを愛して居らつしやるつて？

金井 さうです、殊に切るに切れない間柄ですもの。

お花 それは眞實ですか？

金井 眞實ですとも。

お花は眼に涙を湛へ。

お花 私——何しませう。

而してその御婦人と仰しやるは、何所の何方で御座います？何か隠さないで云つて下さい。

金井 その二人の婦人ですか。

お花 さうです。

金井 その御婦人は……



お花 その婦人は？

金井 お母アさんと實姉さんです。

お花 あらッ！お母アさんとお實姉さんですの、ア、安心した、私はまた他に増花でも……とおもふて。

金井 金井は紳士です、許嫁を忘れ仇し婦女に眼をうつしません。

お花 そんな方で御座いますなら私は生涯の僥倖ですわ。

お花 而して金井さんの御器量は？

金井 教育は高等中學卒業……

お花 私の申すは御容貌のとて御座います。

金井 この答は頗る至難しいですよ。

お花 では醜男子で居らつしやるのですね。

金井 醜男子かな、自分はさのみ醜男子とおもはないが？



と小聲で云ふ。

お花 醜にくもつて居らつしやらないのですね。

金井 マアそんなものでせう。

お花 失禮で御座いますが、貴方と熟が美男で居らつしやいますか？

金井 私と？……それは益々難問ですね。

お花 貴方とは？

金井 さう御難問では實際困るですよ。

金井は鐘が鳴つたか、撞木が鳴つたかと問はれたかの思ひ。

金井 マア似たものですね。

お花 マア似たとは？

金井 何も困りますよ、お花さん、實に困りますね。

お花 そんなにお困りで御座いますの、お氣の毒さふね。



金井 全くお氣の毒さまでですよ。

お花 では矢張お氣の毒さまでですが、何か判然と、貴方と金井さんと熟が美男子で居らつしやいますか、お聞かせを願ひます。

金井 二人とも同一とで異りません。

お花 お異りが御座いませんか？殆で双胎兒のやうですと。

金井 私と同一やうでは、御意に召しませんか？

金井は少々心配の氣味、正宗の瓶詰を手土産に携へ來りしも、先方が何やら下戸らしきに。

お花 貴方と同一やうな方なれば、私は僥倖者で御座います。

金井 眞實に？

お花 眞實で御座いますとも。

下戸と思ひしは誤認、事實は正宗を腰に帯びる勇者なりき。



金井 ヤレ〜安心!

お花 何が御安心?

金井 貴女も金井も御満足であるから、安心致しましたです。

と答ふる際しも後方より、そんなに君は安心かねと。突如に叫ぶものあり。

+

障子を開ければ、若く縁滴る小松原、老いにし湖の切口は。不風流なる西洋櫛に似たる橋の架かれる濱名湖を眼下に眺め得る辨大樓の二階座敷、慾輪深造は獨り徒爾と坐り居りしが、何思ひ出しけん慌忽て、手を打鳴らして、女中を呼びぬ。

深造は來りし女中を見て。



深造

お花——娘は何處へ行きましたか?

女中

お嬢さんで御座いますか?、何處へ行らつしやいましたか、私は存じませんが。

深造

存じませんでは困りますぢや、彼女は大切な——大事な實娘ぢや。御尤もしやまだ。

深造

他家の娘さんのやうに、安々した娘ぢやないでの。

女中

お高いお嬢さんかね。

深造

お前さんが聞いたとのないほど、高値——大切な娘ぢや。百何萬兩といふ娘ぢや。

女中

ヒヤ!——何萬兩? オツ魂消たよ。

深造

吃驚したぢやらう。その娘が屋外へ出て行くに。その行先を聞いて置いて下さらぬとは、噂ほどでない不親切ぢや。斯様に丁寧で



ないことを最初に聞いて居たなら、大枚二圓なんていふお茶代を出しはせなんだに、ア、勿體なや勿體なや。

お前さんでは力が籠らぬ、番頭さんと呼んで下され。

深造は娘お花が居らざるより、むしやくいやく腹に、煙草を二三服スバく

深造 ゴホンく

深造は煙草に咽せぶ、女中は氣の毒と深造の後に廻はりて介抱しつゝ脊を撫づ。

深造 ゴホンく、乃公の脊を撫るより早く娘を——お花をな、ゴホンく。

女中は番頭平造を呼びに下へ行く。

深造 ヤレく勿體なやく、充分に煙草を喫まずに咳をして、折角の煙草一服無効にしてのけた、一服の煙草も黄金の斷片じやに、ア



—勿體なや。

番頭平造は女中の通知に、深造の部屋に入來り、丁重に叩頭をして。

番頭 え、何か御用事でも？

深造

番頭さんか、他のとでも御座らぬが一寸お女中まで話して置きました、乃公の娘——お花が知れませぬぢや旅館は客人の大切なものは注意して下さる筈のものぢやに……。

番頭

御尤もさま、仰せの通り手前方に於きましては、御所持金、金銀時計、指輪、簪、その他御大切なものは、お預り申しますると、大金庫の内へ仕舞置きますやうな次第で……。

深造

金側の時計が幾何金します、得もや一萬圓はしますまい。

番頭

何して。一萬圓しますまい、貴方は番頭さんだけあつて、流石に豪い點が



ある、感心しました——お褒め申しますぢや、ところでぢや一萬圓せぬ時計なぞを、大切に金庫へ仕舞ひ、乃私の娘お花——がぢや、百何萬圓といふものを……。

番頭 お嬢さんと仰せになりますは、先刻屋外へお出掛けになりましたか？

深造 さうぢや、さうで御座るぢや。それは兎も角百何萬圓といふたいした金を、何故注意をして下さらなかつた。

番頭 百何萬圓?! 。

深造 乃公が云ふのが無理か、乃公は心配で氣が狂ひさうぢや。

番頭 御尤も、百何萬圓御紛失なまつては、御心配は御尤で、私なれば落膽で死んで仕舞ます、殊にお嬢さんが……。

深造 番頭どん察して下され。



番頭 お察し申しますとも、時機を失ふては大變で御座いかますら、兎も角も何はさて置いても、一分も早く警察署へ……。

深造 さうぢや、それが何よりぢや。

番頭 では女中を警察署へ走らせませう。

お鉢さん、お皿さん。

と呼ぶ、女中は慌忙て上り来る。

女中 何ぞ御用？

番頭 用だく用もく大切な用事だ、警察署へ行つて巡查を呼んで来い百萬圓の紛失だといつてな。

深造 百萬圓ぢやない、百五十萬圓？

番頭 百五十萬圓！

斯かる所へ娘お花緩々歸り来る、深造はお花を見るより飛上つて喜び。



深造 お花か！、お前は何所へ行つて居つたのぢや。

お父さんはお前が居らぬ故、何位心配したか知ればせぬ。

番頭 お嬢さんがお歸へり遊ばして、先づお芽出度う御座います、而して百五十萬圓とやらは？

深造 娘——お花、一寸こゝへお出で。

深造はお花を床の間に坐らせて、お花を指さし。

深造 番頭どの、これが百五十萬圓の娘ぢや——嫁ぢや。

十一

笑井は輕やかに金井の脊を敲き莞爾しながら。

君、金井君、僕が新橋の停車場で、君に是非辨天島の海水浴で、

二三日の日子を送りたまへと云つたとき君は何と云はれた、歸路



なれば立寄ると云つたね、君、君、君は親友たる僕——小學時代から苦樂を共にして居る僕——その僕の意見を、何故一度で「ウン諾々」とうけて呉れなかつた、見たまへ……

笑井は肩を聳やかし。

僕が云つた如く、君がこの辨天島へ來られたればこそ、許嫁のお花嬢に會ひ得たのだよ、若し不幸にして僕が硬骨漢ならずして、君の意見に盲従し大阪へ直行して居つたなら、お花嬢と會合は出來なかつたらう、のみならず列車が脱線して——イヤ脱線位じやない、機關車が衝突し大破裂して、君は今頃既に鬼籍に……鬼籍は甚だ面白くない、兎に角君は愛するお花嬢を遺して、他界の人となつて居つたかも知れない、僥倖に先見の明ある僕が。僕の威力を以て君を屈服せしめたから、君はお花嬢に會ひ得たのぢやぞ。



金井も莞爾と笑ひながら。

金井 さうかな。

笑井 さうかな——とは驚いた、頗る冷淡な言葉だ、君が機關車破裂のため死んで見たまへ、お花嬢は今頃泣きの涙で、戀の無常を感じ比丘尼になつて居つたかも知れぬ——イヤ確に緑の黒髪を根からプツリ断つて浮屠氏の門に入つたらう——さうとすれば、僕は君の救命の恩人なり、戀愛の大恩人である。

金井 なる程。

笑井 なる程——なる程なる言葉も、アマリ感心せぬ言葉だ。

金井 なか／＼六ヶしいな。

笑井 大問題だ、人命問題だからな。

金井 それではマア君の意見通りとして置いて、機關車が破裂して僕が死



んだとするさ。

笑井 とするさぢやない、確に死んで居つた、手足——位でない身體は支離滅裂……

金井 解つたく。

で機關が破裂して死ぬとして、僕が乗つて居る客車には、僕の他に乗客はないのか？

笑井 そりやあるさ、老人もあれば青年もあり、老婆あれば少女もあり、おまけに藝妓もあれば女中もありよ。

金井 その他にないかね？

笑井 あるさ、鼻下髭先生もあれば……

金井 それ限り？

笑井 まだある、奥さまあれば乳婆もあり、従つて赤子もありよ。



金井 それ限り。
笑井 まだくあるさ、さう僕を攻めて列べさすなよ。
金井 だつて必要なもの。
笑井 そんなに必要かね？
金井 必要だとも。
笑井 それから赤子限りかね？
笑井 マアそれ位にして置いて呉れたまへ。
金井 イヤまだある。
笑井 では誰だか僕に代つて説明て呉れたまへ。
金井 云はうか？
笑井 たのむ。
金井 まだあるのは。



笑井 乗つて居つたは？
金井 乗つて居つたは……
笑井 乗つて居つたは？
金井 笑井福三といふものだ。
笑井 アー僕か？さうだつた僕は僕のことを忘れて居つたな。
金井 君も乗つて居つたらう。
笑井 勿論く。
金井 では機關の破裂で君も手足——身體は支離滅裂……
笑井 僕は死ぬとは好まないよ。
金井 機關の破裂だもの致方がないよ。
笑井 アー困つた、さうなると生命保険は必要だな、遺族のものゝため
に。



金井 さうだとも。
 笑井 遺言書も必要だな。
 金井 さうだとも。
 笑井 公證人も必要だな。
 金井 さうだとも。
 笑井 親族の立會人も必要だな。
 金井 さうだとも。
 笑井 病中なれば醫師の立合も必要だな。
 金井 さうだとも。
 笑井 然し僕は死ぬのは否だよ。
 金井 さうだとも。
 金井は單に「さうだとも」と答へつゝ、何か切に考へて居る、笑井は金



井に眼をつけて。
 笑井 君、君は何か心配でもあるか、切に何か考へて居るやうぢやか……
 金井 別段心配といふほどでもないが、君が腰掛の後で聞いて居つた通り、僕はお花——さんに僕が金井であることを明さないで、お花さんの意志を試したから、お花さんが後日僕に怒りはせぬかとおもふて……
 笑井 そんなと位關ふものか、結句二人の痴話の材料になるさ。
 金井 さうだらうか？
 笑井 さうだとも、だから安心して居たまへ、それを彼我お花さんが云へば、僕がお花さんを叱つてやるよ。
 それはさうと、君、今回の旅行ほど面白い旅行はないよ、何も不思議に出會が多いよ。



金井 さうか。

笑井 君がお花さんと偶然會つたらう。

金井 さう——

笑井 僕は、僕で僕の從兄に偶然會つたよ。

金井 君の從兄といふと？

笑井 大阪に住居して居る横井戀次郎といふものだが、頗る嫉妬心の深い奴で、下等な人物ぢや。

金井 さうか、然し血族のものを悪く云ふのは可くないよ。

金井 悪くは云はないが、それが事實だから……それで野奴は野奴のやうな下等な人物を連れて、同じ辨天樓へ一時間ほど以前に著いて、何だか二人でキョロくして居つた。

と語る際から小雨一つ——二つ——三つ四つ。



十二

辨天樓の二階、慾輪深造の室に深造をはじめ、横井戀次郎、粕利鳥三の三人膝を合して、何やら語りつゝあり。

深造 海水浴なれば濱寺——堺、西之宮になさればお近いに……イヤそれよりも天保山なれば尙近くて便利——その上金もかゝらぬのにな……

横井 私は海水浴の費用位は何でもありません、場合によれば……

深造 さやうかいな、モシ粕利さん現今の若い方は、兎角あれぢやで金が出來んのぢや。

粕利 さうですな。

深造 さうぢやらうがな、海水に浴るなら何所でも可い筈ぢや、天保山



でも堺でも紀州灘でも遠州灘でも、玄海灘でもぢやな、總じて潮水でさへあれは、海水浴になるのぢやから可い、それに須磨ぢや舞子ぢや、濱寺ぢや大磯ぢや、何所でなふては不可といふは、海水浴をしたいのでなふて、遊び暮したいからぢや、な、さうやないか。

粕利

そんなものですかな。

深造

ですかなやない、必度さうぢや、昔時は海へ入つて、バチャ〜ザブ〜するのは船夫に限つたものや。

粕利

然し船夫ばかりやおませんせ。

深造

何を云ひなさる、船夫の外に海でザブ〜チャブ〜やるものがあらうかい、考へて見なされ。御座りますせ〜。

粕利

深造

あるかな？

粕利

御座ります〜。

深造

あれば云ふて見なされ、ありはせぬぢや、若しもあつたなら私はお茶を馳走しませう。

粕利

お茶？

深造

ハイお茶ぢや、お茶は暑氣避けに大妙じや「暑氣につけてお茶一つ」と端唄にもありますぢや、原來お茶は印度のもので、梵語でチャと云ふのぢや、それが支那へ傳つて、茶と云ふて、それが日本へ來たのぢやと住持が云ふて御座つたが、その通りぢやその證據は、お釋迦さまの産湯はお茶であつた。

粕利

何所でそんなと聞きやがつたかな。

と粕利は密に獨語さぬ。





深造 何ぢやと？

粕利 六ヶしいものですな。

深造 ぢやから結構な有難いお茶を御馳走しませう、で云ひなされ。

粕利 先づ名高いは敦盛——一の谷で馬に乗つて海へザンブと入りまし
たな。

深造 アレハ戦争のときぢや。

粕利 戦争やらうが何やらうが……

前刻より二人の問答を聞き居る横井は、焦燥たる氣味にて。

横井 粕利さん、そんなとは何でも可ぢやないか。

さて慾輪さん、貴方は私に二三日後に來るやうに、約束して置いて
一言のお断りもなく、當地へお出立なさつて、アンマリぢやあり
ませんか。



深造

オ、さうく、さうでしたけな、年老ると物事を失念まして何も
なりません、老年ぢやで御免なされ。

實は娘が病氣ぢやと云ひ居りましたで、養生のため當地へまゐり
ましたぢや。

さやうか、養生のためですて？

病氣での……然し御見舞物などは下されぬやうにな……お氣
の毒ぢやで……

横井

見舞物！フン見舞物！私はまだそれほど馬鹿ぢやあ……
りませんと云はんとする横井を粗利はなだめ。

粕利

馬關……若旦那は馬關と仙臺に御用が御座いますので仙臺の方
へ……

深造

さやうかいな、何の御用で？



粕利 若旦那のお父さんが、御持ちになつて居りました、仙臺の鑛山——
抵當流れになつた鑛山な。

深造 聞いて居りますすぢや、最初私へ話があつた。

粕利 さうです、あれから純金が出ましにのです。

深造 あれから純金が………

粕利 それで東京から三百萬圓の購買主が………

深造 三百萬圓？

粕利 三百萬圓です。

深造 さやうかいな。

マア横井さん戀次郎さん、モそつと私の方へおすゝみなされ。

女中くお女中、旨い菓子を下され。戀次郎さん、その内にお花
が歸つて來ますから、緩々して下され。

深造は幼児が正月——お祭りにでも會つた如く悦ぶ。

十三

磁石の針が鐵に動かさるゝかのやうに、深造の心は三百萬圓の呼聲に誘
はれて、お花を横井の庭園に移植さんと思ひぬ、さりとは黄金肥料の
効の顯著さ！、砂糖に集る蟻の現金さ！。

粕利さんと毎々話して居ますのぢやが、横井さん貴方は金儲がナ
カくお巧い、三百萬圓の鑛山を二萬五千圓で、お引受けなさつ
たは人間業ぢやない、神さま業ぢや——金に縁ある惠美須さま……
……イヤ金の神さま業ぢや、豪いお方ぢや私は貴方のやうな豪い
方に娘のお花を嫁に貰ふて欲しいと思ふてますのぢや、六ヶしう
云へば貴方は私の理想とかの婿さまぢやアハ、ハ、ハ。





と薄輕笑ひ。

粕利 さうですとも、横井の若旦那はお豪いお方です、二萬五千圓を僅か三月の期間に三百萬圓三——百——萬——萬圓になさつたのですもの。

と粕利は力を込めて云ふ。

深造 三百萬圓！年一割の利廻りにするとして三十萬圓ぢやな、確實な銀行へ定期預金にしても、一年に十八萬圓利息がありますな、結構ぢやわい有難いな、その利息の一割を私は親じやで貰ふとなると、一年一萬八千圓かアハ、、、、な、横井さん親は親の權利があつて、子は子の義務がありますものぢや、そんなとは私が云はいても、豪い貴方のとぢやで御承知ぢやらうな？

横井 それは勿論のとですとも、私は親のためなら十八萬圓位のは、



何時でも差上げますとも。

深造 結構なお婿どのぢやな。

横井 さるかはり親も婿のいふとを承諾下さらなければ……

深造 金銭は親子でも兄弟でも夫婦でも他人ぢやで、フン諾々と云ふ譯には行かぬけれど、その他のとなら親子ぢやもの、殊に義理ある婿のいふとを、諾々と云はないで何としませうぞい、親の慈悲は其處にありますぢやアハ、、、、。

横井 ではお花さんと私と結婚を……

深造 婚禮かいな、婚禮は内祝言にするに限り、如何立派な婚禮をして「四海靜かに御代も納まる時津風」と謠ふたとて、貧乏すると家内の浪は靜かに納まりませんぢや、肴は結び昆布一つでも金銭が出来ればよろこんぶと、芽出度家内が納まりますで、内祝言



に限りませうわい。

粕利 さうく、さうですとも内祝言に限りませう。

横井 だつて人間の、三大禮の一……………

と言はんとすれば、粕利は眼にて云ふなと横井に教へつ。

粕利 三大禮の一ぢやといふて、世間の多數は無用金銭を消費ますが阿呆らしいとですがな。

深造 眞實にさうぢや。

横井 内祝言であれば料理屋……………

粕利 さやうく若旦那の仰しやる通り料理屋などは無用のものです、な慾輪の旦那。

深造 さうぢやく料理屋くと云ふ野奴に金儲する野奴はありやせん早い話が金子を貸す人間は、決して料理屋へ行かうなぞと云ひは



せぬ、大體金子を借る野奴が料理屋へ行くものぢや、金貸業は料理を饗應はれるものぢや、昔時から金貸業が饗應た例はない、お大名へ金子を貸した十人兩替……………鴻重、鴻正、米長、錢忠、その他の兩替屋は、お大名から馳走せられたものぢや、錢忠といへば現今の木原忠兵衛さんの先祖ぢや。

粕利 へエー、さうですか、そんなとはさて置いて、内祝言ですな、それを一寸今晚當旅館でこつそりと……………

深造 それはな私は承知ぢやが、娘が何ていふか顔を見た上で……………お嬢さんのお顔を仰しやると?

深造 三百萬圓といふ娘の顔を見た上ぢや、平易云へば三百萬圓のお取引が濟んでの上ぢやハア、ハア、ハア。



十四

お花は許嫁の夫金井持太郎の性格を聞くまでは、流石に娘氣質の小さき胸裡に、未来のことを想ひて、快樂と杞憂とを戦はせしも、一度金井の性格を聞きてより、杞憂の雲は快樂の光りに散され、一日も早く東京に行かんと思ひ心いそぐ、然しそれと共に恥かしさの度を増しぬ。
深造は娘の意中を知らざれば、お花を横井に妻さんと思ひ決めて、お花に向ひ。

深造 横井さんは一年に確實銀行へ預けて置いて、一萬八千圓といふ利息が入る、元金三百萬圓といふ、大金を僅か三月に儲けた甲斐性ものぢや——で乃公は其方と戀次郎さんを、夫婦にしようと思ひます、平常から孝行な其方ぢやから「否ぢや」などと、親不幸な



とを云ひはしますまいが、念のために一言云ふて置きます。

樂みぢやみしお花は、無情の風に襲はれぬ、花散るか？、風止むか？

お花 お父さん、貴父は何を仰しやる、妾は貴父がお結びなされた、金井持太郎といふ許嫁の夫が御座いますに……

深造 乃公が結んだ許嫁の夫——それはあつた、ありましたぢや、然し今は既に不縁になりましたわい。

お花 それは何日？

深造 即今！

お花 金井さまに御面會なさらないで、何して貴父お單獨で不縁が出来ます？

深造 そりや出来ませとも、乃公は持太郎さんに一言のお断りせんでも不縁することが出来ます。



お花 マア不義理な！人間として理由もなふ約束を破るといふことが……
深造 何も乃公は持太郎さんに約束を破はしませんちや、乃公は持太郎さん
お花 んと何の約束も仕たとはないわい。
深造 約束したとはない、許嫁なかつたことがない、お父さん——貴父——
お花 お年齢をお重ねなかつた貴父が、よくもそんな亂暴な——不義理
なことを……
深造 何も不義理ぢやない、其方は赤子であつたから知らぬが、乃公が
許嫁の約束したは、持太郎さんぢやない、持太郎さんのお父さん
の持兵衛さんぢや、了解つたか？、よいか？、約束したのは持兵
衛さんぢや、持兵衛さんとするれば、乃公は持兵衛さんに約束通り
にすれば可ぢやないか。
お花 さうですとも。



深造 さうぢやらう、ところでその持兵衛さんは死んで仕舞はつしやつ
たで、乃公は約束の通り仕たいのぢやが、相手がないで仕方がな
いわい。
お花 許嫁の夫はお父さんの持兵衛さんでは御座いませんよ、御子息の
持太郎さんで御座います。
深造 それはさうぢや。
お花 では何日持太郎さんが、お死去遊ばしました？
深造 持太郎さんは死なしやりはせぬが、乃公が約束を仕た、當人の持
兵衛さんが死なしやつたので、止むを得ぬぢやないか。
お花 許嫁の御本人の持太郎さんが、御死去なかつたのでないのに、止
むを得ないなどといふとは御座いません、妾はそんな不義理なと
は得致しません、婦女の大切な——生命ともいふ貞操は、お父さ



んの仰しやるやうな、不義理などをさせません。

深造

無茶などを云ひなさるな、貞操なぞといふとは當世のものぢやないわい、當世のものがそんな當世でない貞操を守つては、第一時世に合はぬ、大體貞操なぞといふとは氣儘ものゝ云ふとぢや。

お花

貞操は何故氣儘で御座いますか？

深造

氣儘ぢやとも、以前の婿が好きで後の婿を好かんと云ふのは氣儘ぢや、鯛が好きで大根が否ぢやといふのと同じとて、金子を儲て財産を作へるものはそんなとを、云はぬ筈ぢや、義理ぢやとか人情ぢやとか云ふ氣儘ものは、金子の貴きを知らぬ阿呆ぢや、其方は乃公の娘ぢやないか——實子ぢやないか、親に似ぬ子は鬼子ぢやと、昔時から云ひますぢや、其方は不孝のものになりたいか？ お父さん、貴父は義理知らずになりたう御座いますか？

お花

深造

其方は親不孝になりたいか？

お花

義理知らずに……。

深造

親不孝に……。

父娘相争ふ折から障子の外より。

親不孝にもならず、義理知らずにもならぬ方法を教へて上げませう。

と云ふものあり。

十五

「親不孝にもならず、義理知らずにもならない、方法を教へて上げませう」とは父娘の開いた口に牡丹餅！、昔時こんな利口者がありたらんには、獵人も狐兎を設ける手數もなく、野狐も叔父の白藏主に化ける厄介





もなく、狂言、長唄、所作の作者も釣狐の筆を採らで、晝寝でもなし得たらんに、實に文明は生物を利口ならしむ、見さつしやい！、法律は満十六歳以上ならでは、娼妓を許可しないに、十三四歳で襟かへして小鼻をペコつかす舞妓——それを喜ぶ親、オヤ——甲斐性ものだと褒める世間、ペスト菌も利口もので、我家の大事の——三毛猫の體に潜伏とかや！オホンと一咳して障子を開け、笑井福三は眞面目な顔して入來りて。

笑井 その方法は失禮ながら、私がお教へ致しませう。

深造は笑井の顔を眺めて茫然、笑井はお花に向ひ。

笑井 お花さん、先刻は失禮しました。

お花 イエ妾の方が……。

深造 お花、其方は此御方とお馴染かい？

お花 ハイ、識つて居りますよ、眞實に御親切な方でね。



深造はビクリと驚きつ。

深造 何ぢや、御親切な方ぢやと……。

深造は吐息をつき。

深造 親切な方——、ア、男子が婦女へ親切……そんな親切は乃公は有難うないぢや、男子が婦女に親切といへばいづれ碌なとはありはせぬ。

お花 お父さん、何故さうですの？、お父さん、貴父は男子でなくつて？

深造 乃公は立派な男子ぢや、二貫目の金子から家主になり、金貸業にまでなつた立派な男子ぢや。

お花 ではお父さんの御親切も碌でないと？。

深造 乃公の親切は特別ぢや。

お花 では此御方——笑井さんの御親切も特別ですよ。



深造 何に？特別ぢやと。

笑井 さうです、特別ですよ特製ですよ、特製の〜のアイスクリーム
といふやうな冷やかなのでなく、アイスクリームの溶解やうな温
かい親切です。

深造 温かい親切！、この様子では何やら三百萬圓の秘藏娘に蟲が附い
たらしい、しようの悪るさに蟲が附いたと濟しては居られぬ、ど
えらいとになつたな、三百萬圓が臺なしになつたかな。

お花 お父さん、妾が今ま申した通り、この笑井さんは御親切で居らつ
しやるんですから、その方法といふのを教へて貰つて下さいまし。
深造 そんな方法なんぞ聞きたくないわい、親不孝ともならず、義理知
らずにもならぬ方法と言へば、聞かずともお父さんは解つて居ま
す、双方へも御嫁におあげなさるな、而して私へ下さいと云ふ位



笑井 アハ、、、。
のどぢや、そんなとフンさやうかと聞いて居られるかい。

深造 何がアハ、、、ぢや、お前さんは乃公の大事の〜娘を手に入れ
さつしやたで、アハ、、、知らぬが、乃公は三百萬圓と百五十
萬圓、合計四百五十萬圓といふ金額を損したのぢやで、トンとア
ハ、、、ぢやないわい。

笑井 アハ、、、。
まだアハ、、、ぢやと。
可笑いから僕はアハ、、、だ。

深造 何が可笑しい、大それた乃公に四百五十萬圓といふ損を懸て……
笑井 貴方は私とお花さんと、情交でもして居るやうに誤解へて居らつ
しやるやうだが、失禮ながら私はお花さんと情交せずとも、華族



のお姫さまはじめ、岩崎のお嬢さん、下卑ては居るが藝妓等十五
六人に惚れられて、困つて居る位です。

お花 そんな好男子じゃから、お花も……。

深造 お父さん、此の笑井さんと妾は別段何でもありませんよ。

深造 何でもないので何して識つて居る？

笑井 僕は金井持太郎の親友であつて、偶然松原でお花さんと面會たの
です。

深造 金井さんの御親類？アノ御親類！

笑井 親類ぢやないですが。親類同様の親友です。

深造 ア、そんな御方に豪い秘密ごとを聞かれましたな、三百萬圓の一
件……。

笑井 聞きました——が貴方が私のお教へ申す、親不孝にもならず、義



理知らずにもならない方法に、お服従なさるなら聞いたことを忘れ
ませう、而して百五十萬圓の金儲をさせませう。

深造 承諾ますともく。

笑井 では最初の許嫁通り、お花さんを金井さんへお嫁にお上げなさい

貴方は持太郎さんの御親父持兵衛さんが、御死去なさつたと仰せ

なさつたが、持兵衛さんは御壯健で居られますよ。

深造 エーッ！、持兵衛さんが……でも乃公は御死去なさつた電報を受

取りましたぢや、お花、鞆の中から電報を出してお呉れ。

深造は袂より眼鏡を取出し、眼玉の曇を拭ひぬ。

十六

深造は大久保彦左式の大眼鏡を懸け、お花が鞆より取出して渡す電報を



笑井福三に示し。

深造 それこの電報を御覽なされ「チ、シンダイマカタツケタ」と御座るぢや、乃公が嘘を云ひませうかい。

笑井は電報を見てヤ、頸を傾けしが。

笑井 なる程「父死んだ今片附けた」とあるが、持兵衛さんはお健固だ決して御死去なさいません、お感胃さへお召しなさらないです、現に私が金井君——の親友と東京を出立するとき、金井君の御親父のお目にかゝつたです、

深造 それは多分持兵衛さんの幽霊ぢや御座るまいか、昔時、天満の醬油屋の後家さんが、巨額の貸金をしたまふでコロリと死去なしたつたが、貸金が心に懸つて往生が出来んで、毎夜子の刻——九つ——と云ふては貴方やお花にはお了解になるまいが、現今の十



二時頃になると「妾の貸金返戻せ」と云ふてな、幽霊になつて出さしやつたところがあるで持兵衛さんも後家さんと同一かも知れぬ、失禮じやが貴方は持兵衛さんに借金がおありなさりやせんかあるなれば返金しておあげなされ、金利といふものは債務者の方では大義なさうぢやが、債権者の方では、細小ものぢや、貴方のやうに金鎖などを立派に纏けて御座る方は、得てその金鎖に意志を縛られたり、金鎖が借金の鎖になつて、身動きの出来ぬやうになるものぢや。

笑井 なる程、これは名言だ、虚飾の金鎖が意志の自由を束縛するとは説き得て妙だ、では、光輝あるダイヤモンドは、人間を盲目ならしめ、情婦ある鈴木主水は女房を苦勞せしむかアハ、ハ、ハ、深造は自分の言葉を、笑井に名言なりと褒められイト得意となり。



深造

笑井さん、貴方は大學校へ御通學になつたのぢやらうな、それに相違ない、それでなきや、乃公が云ふ言葉の妙味が即今のやうに了解せんわい、な貴方は大學校の何やら學士さんぢやらう。娘——お花、其方も學問を眞面目に勉強しさへすれば、笑井さんのやうに乃公の云ふ語の妙味が了解、チトしつかりして呉れ。イヤ笑井さん、何所でも娘は親より年齢を重ぬので、譯が了解ませんぢやアハ、、、。

笑井

アハ、、、、そうですとも、アハ、、、、このアイスクリーム哲學——鬼權哲學には、希臘の詭辯哲學者も白旗を掲げるだらう。

それはさうとして、怒輪さん先刻お話した「親不孝にもならず、貴方も金井家へ義理知らず」にもならぬ、頗的珍妙の方法を教へ



て上げませうか？

深造

貴方のやうな學者なら、その素手々古珍妙の方法とやらが御座らうで、コツソリ傳授して下され、この老人が願ひ申しますぢや、若しその方法で巧妙行けば、へ、駿河屋のカステラー——ぢやない羊羹位は御禮致しますわい。

笑井はグツト勿體ぶり。

笑井

オホン、吾輩は學者だから、些々たる禮物……。

深造

貴方——先生、貴方がさうと仰しやるのは酒の和語で御座るのぢやらう、了解ました貴方は上戸ぢやから、羊羹のやうな甘いものより、御酒の方が適と仰しやるとぢやらう、宜しい御酒を御禮に差上げませう、正宗——櫻正宗——一筋の通つたのを二升——と云へば僅なやうぢやが一圓八十錢ぢや、チヨツと一言教へて、



一圓八十錢の仕事なら悪うおまへんがな。

笑井 吾輩は學者だから禮物は受けん。

深造はボンと手を拍ち。

深造 豪い、流石學者さんぢや、なんなら先生、乃公の貸倒れを貴方取

つて下さらぬか。

笑井 これは驚いた、確にシャイロツク以上だ、冷酷なる我利もこれ位

發達すると涙を過ぎて滑稽の域に入ると。

深造 先生、そんな六ヶしいとは省畧にして、何卒その方法とやらを教

へて下され。

笑井 教へませう、貴方の所謂傳授を致しませう。

その方法といふはな。

深造 その方法といふは？



笑井 吾輩の命令に服従するか？

と笑井は嚴然と構へぬ、檢事が被告に對するかのやうに。

深造 致します〜。

笑井 その方法は外でもない。

深造 ヘイ〜。

笑井 持兵衛さんは死去したのでないから、最初の許嫁の約束に従ひ。

持太郎君とお花さんを夫婦にするのぢや。

深造 でも持兵衛さんが死去なられたとは、この電報が證據……………。

と深造は電報を再び笑井に見せんとする時障子の外より。

その電報は誤字があります。

と云ふ聲さこえぬ。



十七

障子の外より「その電報は誤字があります」といふものあるに、深造父娘に笑井は視線を障子に向くれば「御免」と云ひつゝ金井持太郎は入來りぬ。

お花 オヤ！、貴方は先刻松原で……。

金井 さやう。

深造は金井とお花の顔を見くらべつ。

深造 妙齡の娘と豌豆は利益のあるものぢやが、兎角蟲の附きやすいもので、心配でなりやせん。

これお花、其方は此方と？。

深造は金井を指さして。



深造

松原とやらで何日お馴染になつたのぢや、大切な親——その乃公に一言も話をせずに、こんな美男子と密々會ふのは、いづれ碌なとぢやない、あた大それた——あた大膽な。あた淫奔な——さりとは不品行な、何たることをなさるのぢや、はてさて薬袋もない。

深造はお花に叱言をいひしが、何を思ひけん吐息つき。

深造

ア、乃公の大事の娘をば、翫弄物にしようと思ふて、四圍八方から四百五十萬圓といふ娘に手を出しくさる、こんなとでは乃公は心配で夜も満足に寝られやせん、考へると乃公は金銭と娘の年齢の數を算へるのと、その番人に生れたのか知らんてな？

乃公はそんな約束で人間に生れたのぢやあるまいに、南無阿彌陀佛。

實に苦しいときの神だのみとは金言！、神佛は御如才なく人間の虚に乗



じて、お得意先をお増しなさるもの、その呼吸を知らぬ人間は、蛭子殿が「世の中に金の生る木があるなれば我に與へよ人に與へん」と仰せになつた内密語を知らずに、蛭子殿のお得意になるものなり、さりとは人間は阿呆!

深造 この上は神佛の御力をお願ひ申して、娘を守護て貫はにやならぬ南無阿彌陀佛。

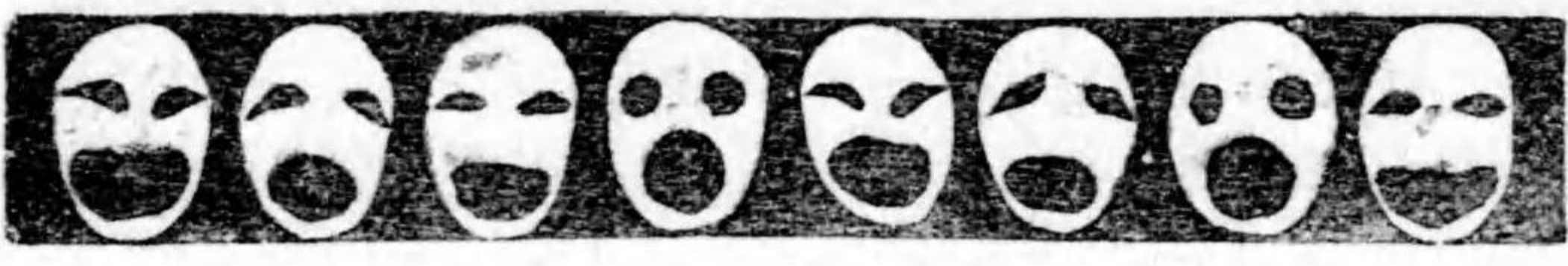
金井は深造の愚痴に呆れしが。

金井 そんな御心配なさらないでも、お花さんは親々の許嫁の夫の外に男子と愛情を交はしなさるやうな御方ぢやありませんよ。

深造 乃公もさうは思ふて居りますかの……。

と深造はヤ、安心、これではまだ神佛のお得意先になりさうもなし。

深造 さて「電報が間違ふて居る」と云はしやつたは貴方かな？。



金井 さうです。

深造 それではこの電報が何う間違ふて居ますのぢや？。

金井 その電報に「チ、シンダ、イマカタツケタ」とあるのは「チ、シンダイイマカタツケタ」で、イの下へ、を書くのを失念たのです、何故その電報を打つたかといへば、お花さんと持太郎の婚禮は、金井持兵衛が財産を持太郎さんに譲れば、直ぐ舉行ませうといふお約束であるから、父が財産を譲り片附けたことをお通知するため「父財産今片附ケタ」と略して打電たのです。

深造 ヘエン、さやうかいな、それでは持太郎さんは百五十萬圓の財産を譲受けなかつたのぢやな？

金井 さやうです。

深造 百五十萬圓……。



笑井 百五十萬圓ではありません。

深造 さやうかな。さやうぢやらう、有るやうに見えても無いものは金
錢ぢやでな、世間で云ふやうに百五十萬圓はないものぢや、マア
幾何おました？。

笑井 三百十六萬八千二百四十七圓九十二錢ありました。

深造 三百十六萬！無いやうであるものは金錢で御座るな。

而して笑井さん、この立派な御方は何方で御座るな？。

笑井は金井を指さして。

笑井 此方ですか？。

深造 ヘイ。

笑井 此方は金井持太郎君です。

深造 ヘーッ！。



と深造は飽れぬ。

お花 オヤ！、貴方が妾の……………。

お花はいそ〜。

金井 さうです。

笑井 實は私等が當地へまゐつたは、金井君が貴宅と鑛山の要用を兼ね
大阪へ行かれるので、私も見物旁々同行して、一兩日常海水浴へ
立寄つたのです。

深造 さやうかいな、それはさうと三百十六萬……………。

と深造は再び繰返して云ふ。野良猫は鯉節を削る音に本性を出すもの。

深造 私も娘を連れて東京のお宅へまゐりませうと思ふて、大阪を出立
しましたのぢや、茲所でお目に懸つたが倅ぢやで、笑井さん、貴
方を仲人として直ぐ假祝言をしては、何で御座らうな？。



と深造はホク／＼、際から又もや障子の外より。
その祝言は出来ませう、私は大の不承知で御座る。
と叫ぶものあり。

十八

「その祝言は出来ませう、私は大の不承知で御座る」と四角張つた句調で述べ「御免」とも云はず障子を明け横井戀次郎、續いて粕利鳥三の兩人入來たりて、横井は上席へ無遠慮にとつかと座し、粕利は下席へべたりと座りぬ。

横井 慾輪さん、今申した通り御祝言は私が不承知です。

河口で船を破るとは往々あるとちや、トンダところへ横井が飛び出したものかな、事と品によると折角の花見も、途中の俄雨でおジャンになる



かも知れぬと、深造は鞆面、横井はこんなときに歩を進め、義務の追認を取つて、先取權を占めて置かねばならぬといふ體。

横井 慾輪さん、私が不承知をいふのは正當でせう、貴方は私の妻にお花さんを下さるお約束ですからな。

慾輪 乃公は貴方が云はしやるやうな、確とした約束はしませぬ。

横井 約束をなさらぬと、貴方は私が所有して居る仙臺の鑛山が、三百萬圓の購買者があると、この鳥三さんから聞いて三―百―萬圓に惚れて、私にお花さんを下さると……。

慾輪 それは戯談ぢや、老年のツイ戯談で御座るがな。

粕利 老年の戯談——旦那それこそ戯談ですやらう。

慾輪 なに乃公が——老年の乃公が戯談を云ふものか、阿呆らしうもな



横井

ちや戯談ぢやないんですな？。

慾輪

貴方へ話したは戯談……………。

粕利

戯談だすかい？。

慾輪

戯談……………阿呆らしい。

横井

戯談でなけりや約束通り……………。

慾輪

それは戯談……………。

粕利

これも戯談。

慾輪

さうぢやない。

横井

それでは私の方の……………。

慾輪

さう双方から責めて下さるな、若いものは老年を庇護ものぢや。

横井

それだつて嘘を云はれよば……………。

粕利

戯談と云はれると……………。



慾輪

乃公は老年ぢや、嘘も戯談も云ひはせぬ、さうく方便をな、浮屠家の方便ぢや、貴方等を救助ため云ふた親切ぢや、愛情ぢや、若し先刻乃公が否ぢやと一言に云ふたなら、横井さんは切腹でもなさるぢやらうし、鳥三さんは横井さんの親殿へ申譯がないで、縊死にならしやるぢやらうと思ふて、乃公がお二人をお助けするため方便を云ひましたのぢや。

横井

切腹する……………。

粕利

縊死……………。

慾輪

マアお待ちなされ。

横井

何を？。

慾輪

切腹したり、縊死を。

横井

誰か？。



慾輪 貴方等が。

粕利 阿呆らしい。

横井 馬鹿らしい。

慾輪 でも即今貴方等は切腹する、縊死と云はしやつたが。

横井 誰が？

横井 切腹するものか。

粕利 縊死なんて阿呆らしい。

金井笑井お花は三人の押問答を聞き居たりしが、金井は鳥三に向ひ。

金井 貴方は粕利鳥三さんではありませんか？

鳥三は金井を見て。

粕利 さうでおます、貴方は？

金井 私は東京の金井です。



粕利 この横井さんの仙臺の鑛山を抵當にお取りになつて居つて、今度

三——萬圓で引取つてやらうと仰せ下さります、金井の若旦那で

御座いますか、貴方は私を御記憶になつて居りますに、私が失念

致しまして豪い失禮を致しました。

さて先般はお宅へ伺ひましているくと御馳走を下されまして、

誠に有難う御座いました、へいへい。

粕利は金井にペコ／＼と叩頭をする、それを見て横井は鳶に鮮魚を漬は

れたかの思ひ。

横井 鳥三さん、お前は此方を………？

と金井を眼にて示す。

粕利 この若旦那が貴方の鑛山を三萬圓に………。

横井 三百萬圓の鑛山の口か？



慾輪 鳥三さん、仙臺の鑛山といふのは金井さんが、抵當にお取りになつて居るのかな？

粕利は横井に向ひ。

粕利 若旦那、モー駄目ですから私は白状して仕舞ますよ。

と云ひ慾輪に向ひ。

粕利 さうで御座ります。

慾輪 さうかい、二萬五千圓が三百萬に化けたのかい、アンマリ話が甘過ぎると乃公もおもふたて。

圓滑に本人に瑕瑾をつけず、離縁して親里へ復してやらうと思ふて居る女房でも、女房から離縁して呉れと云はれては、兎角意地になるが人情の弱點、横井は面目玉を踏潰し、心の駒はそれに驚きピンと跳出して金井に向ひ蹄を向けぬ。



横井

貴方が金井君ですか、私——私は横井です、戀次郎です、成程私の鑛山は貴方に抵當に取つて貰つて居る、イヤ抵當に入れて上げてあるが、それは商人として普通のことです。

金井

勿論、さうですとも、抵當にお入れになつたからと云つて不名譽でもなし、取つたからと申して名譽でもありませんさ。

横井

さうでせう、それに貴方は何故私の名譽を傷つけました。公道を歩行て何故足跡をつけると金井は叱られた。

金井

私は貴方の御名譽を傷つけたことは、ありません。

横井

あります、私は貴方に名譽を傷つけられました、それが爲にお花さんとの約束が履行しられぬやうになりました、貴方はそれで紳士ですか、貴方のやうな方を生存して置くとは出来ませんから、私は貴方と決闘致します、決闘を………潔く決闘を………。



十九

横井が「決闘」と叫びしより、お花粕利は青くなり、深造は決闘の意味を解せざるにや平氣な顔。

深造 毛布くと云はしやるは、何ぞ利益毛布の出物でもおますかな？
こんな酷暑時期ぢやで、餘程安いものでないと、末秋まで待たんと賣れまへんせ、而して毛布は白色ですか？青色ですか？、赤色ですか？

横井 毛布——私の云ふのは決闘ぢや、赤色………。

深造 赤色はトント賣れが悪いさうぢや。

横井 私わしの云ふのは赤毛布ぢやない、赤色鮮——血ちを見る決闘——果合はたしあひだ——切合きりあひぢや。



葛籠つからの内うちより珍寶たからが出ると思おもひしに、こは何事なにごと、案外あんぐわいに出たはくお化物けがヒヨコリと出た、深造は眼めをギロリ。

深造 果合はたしあひの決闘けつどうじやと、何を云いはしやる阿呆あほうらしい、而して誰たれと何なんの意恨いこんでその決闘けつどうをなさるのぢや？。

横井 何なんの意恨いこん——誰たれと？、そこに居をる金井かないと戀こいの意恨いこんで。

深造 金井かないさんと？、娘むすめの許嫁よめかけの大事だいじの婿むこさんの持太郎もちたろうさんと、ハレ薬ぐすり袋ふくろもないとを云いはしやるな、此持太郎このもちたろうさんは三百十六萬圓さんびやくじゅうろくまんえんといふ巨額たいがいの黄金かねのかつた身體からだぢや、無茶むちゃも大底たいていに云いなされぢや。

深造は金井かないを保護ほごせんとす、さりとは現金げんきんなお爺ぢいさまなりけり。

横井 何なんに？無茶むちゃ、何が無茶むちゃぢや？。

深造 無茶むちゃぢやあるまいか、乃公わしの婿むこに決闘けつどうなぞといふ、恐おそろしい赤色あかい鮮血あまを流なががすことを、勤しんめなさるは無茶むちゃぢやあるまいか。



横井は戀の失望より氣もそゝろとなり。

横井 貴様のやうな、強慾な——貪慾な奴には用がない、無用とを云はずと爪に火でも點して、指でも焼かぬ用愼せい。

イヤそこの金井——イヤ持太郎、サア私と決闘せい、無言で居ては納らぬぞ、また負たか八聯隊と云はれて居る大阪ものゝ勇氣を見せてやる。

忍耐やうと思ふても、蚊が幾度となく刺に來れば、團扇にツイ手のかゝるもの。

金井 何です私は先刻より無言で居るに貴方は決闘せい〜と、仰せになつて居られるが、貴方は餘程、お逆上になつて居らつしやるらしい「腹立てば先づそのまゝに寝るがよし、覺むれば後にわかるものなり」といふ道歌がありますから、マアお寢なさい。



横井 お寢なさいとは何か？、私は貴様に決闘を申込んで居るのぢや。

金井 私は生命は一つしかないから、御免蒙りますよ。

横井 御免蒙る、御免蒙ると云ふたて私は御免蒙らさぬ。

金井 金井持太郎は紳士ですから、狂人を相手にしないで。

深造 さうぢや〜、その通りじや相手にしなさるな。

と深造は云つてホツト安心。

横井 何に！、おのれは私を金錢に見替へた、薄情老爺ぢや、おのれも

意恨のある奴ぢや、サア私と決闘せい、一打に殺害てやる。

深造 この老人を？。

深造の安心はホンの刹那。

横井 老人ぢやらうが、何ぢやろが關はん、強て否ぢやといふなら、おのれも、金井——貴様も決闘せいでも可い、そのかはり意恨のあ



る皆々の奴を殺害してやる、然しお花さんは殺害さぬ。

お花さん、心配なさるな可愛貴女ぢやもの何の殺害しませうか

い。

猛悪な獸類も戀には優しいものとやら。

金井 決闘に應じなければ、慾輪さんなり、私を殺害すると？、よろし

い——さういふ御意志なら、金井は決闘のお相手になりませう。

雪の重量を耐へつゝありし竹はピンと雪を拂はんとす。

二十

金井が「決闘のお相手になりませう」と答へた一言は、横井に取つては三十日に懸限りに行つて仕拂を受取つたやうに満足なり。

横井 お相手をなさる、流石に豪い。決闘をするのは殺害される覺悟で



お居で。

金井 勿論、決闘は雞頭花ではないから、花見に行くとは思つては居な

いさ。

横井 では、これから直ぐ決闘しよう。

と力む、お花はワナ／＼氣が氣でなし、笑井は先刻より無語で金井、横井、深造等の言葉を聞き居りしが。

笑井 イヤその決闘は僕が不賛成だ、斯ういふ笑井福三君が大不賛成ぢ

や、決闘は死んで花實が咲くかいなといふ、宇宙の眞理に反いた

野暮の凝結物——粹の大敵だから、僕は徹頭徹尾大不賛成だ。

オイ戀ぢやん、君は戀の闇雲に包圍れ、お先眞暗で眼が見えない

から、僕が——君の從兄の僕が、こゝに居るのが見えぬのだな、

金井君は僕の親友だし、貴様は僕の從弟だぞ、その二人を僕が決